

つゆのあとさき

永井荷風

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

（例）女給じょきゅう

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）市ヶ谷いちがや

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号またはUnicode、底本のページと行数）

（例）「#」「<編のつくり」の「戸」に代えて「戸の旧字」、第  
水準2-3-48】

-----  
「#5字下げ」―「#」「―」は中見出し】

女給じょきゅうの君江きみえは午後三時からその日は銀座通のカツフェーへ出ればよいので、市ヶ谷いちがや本村町ほんむらちちょうの貸間ほりばたからぶらぶら堀端ほりばたを歩み見附外みつけそとから乗った乗合自動車みっけそとを日比谷ひびがやで下りた。そして鉄道線路のガードを前にして、場末

の町へでも行ったような飲食店の旗ばかりが目につく横町へ曲り、貸事務所の硝子窓ガラスまどに周易判断金龜堂しゅううえき きんきどうという金文字を掲げた売卜者うらないしやをたずねた。去年の暮あたりから、君江は再三気味のわるい事に出遇であっていたからである。同じカツフェーの女給二、三人と歌舞伎座かぶきざへ行った帰り、シールのコートから揃そろいの大島の羽織と小袖こそでから長襦袢ながじゅばんまで通して袂たもとの先を切られたのが始まりで、その次には真珠入り本鼈甲ほんべつこうのさし櫛くしをどこで抜かれたのか、知らぬ間に抜かれていたことがある。掏摸すじの仕業しわざだと思えばそれまでの事であるが、またどうやら意趣いしゆある者の悪戯いたずらではないかという気がしたのは、その後猫の子の死んだのが貸間の押入に投入れてあつた事である。君江はこの年月随分みだらな生活はして来たものの、しかしそれほど人から怨うらみを受けるような悪いことをした覚えは、どう考えて見てもない。初めは唯不思議だとばかり、さして気にも留めなかつたが、ついこの頃、『街巷新聞』といつて、重おもに銀座辺の飲食店やカツフェーの女の噂うわさをかく余り性の好くない小新聞に、君江が今日まで誰も知ろうはずがないと思つていた事が出ていたので、どうやら急に気味がわるくなつて、人に勧められるがまま、まず卜占うらひをみてもらおうと思つたのである。

『街巷新聞』に出ていた記事は誹謗ひぼうでも中傷でもない。むしろ君江の容姿をほめたたたえた当り触さわりのない記事であるが、その中に君江さんの内腿ちもには子供の時から黒子くろこが一つあつた。これは成長してから浮気家業をするしるしだそうだが、果してその通り、女給さんになつてから黒子はいつの間にか増ふえて三つになつたので、君江さんは後援者が三人できるのだらうと、内心喜んだり気を揉もんだりしているという事が書いてあつた。君江はこれを読んだ時、何だか薄気味のわるい、誠にいやな心持がした。左の内腿に初めは一つであつた黒子がいつとなく並んで三つになつ

たのは決して虚誕うつそでない。全くの事実である。自分でそれと心づいたのは去年の春上野池いけの端はたのカツフェーに始めて女給になつてから、暫しばらくして後銀座へ移つたころである。それを知っているのはまだ女給にならなのちい前から今もつて関係の絶えない松崎という好色の老人と、上野のカツフェー以来とやかく人の噂うわさに上る清岡進という文学者と、まずこの二人しかないはずである。黒子のある場所が他ほかとはちがつて親兄弟でも知るうはずがない。風呂屋ふろやの番頭とてそこまでは気がつくまい。黒子の有無あるなしは別にどうでもよい事であるが、風呂屋の番頭さえ気のつかない事を、どうして新聞記者が知っていたのだらう。君江はこの不審と、去年からの疑惑とを思合おせいあわせて、これから先どんな事が起るかも知れないと、急に空おそろしくなつて、今まで神信心もぢろんは勿論、お御籤みくじ一本引いたことのない身ながら、突然占うらないを見てもらう氣になつたのである。

アパートメントの一室を店にしている新時代の売卜者うらなひやは年の頃四十前後、口髭くちひげを刈り洋服を着、鼈甲べっこうのロイド眼鏡をかけ、デスクに凭もたれて客に対応する様子は見たところ医者か弁護士と変りはない。省線電車しょうせんの往復するのが能く見える硝子窓ガラスまどの上には「天佑平八郎書」とした額を掲げ、壁には日本と世界の地図とを貼り、机の傍の本箱には柵しとを殊にして洋書と帙入ちゅういりの和本とが並べてある。

君江は薄地の肩掛を取つて手に持つたまま、指示ししされた椅子に腰をかける、洋装の売卜者はデスクの上によみかけの書物を閉じ廻転椅子のままぐるりとこちらへ向直むきなつて、

「御縁談ですか。それとも大体にお身の上の吉凶きんぐんを見ましようか。」とわざとらしく笑顔をつくる。君江は伏目ふしめになつて、

「別に縁談というわけでも御在ございません。」

「では、まず大体の事から拝見しましょう。」と易者はあたかも婦人科

の医者が患者の容態をきくように、なりたけ気がねをさせまいと苦心するらしい砕けた言葉づかいになり、「占いも見つけると面白いものと見えまして、いろいろなお客様がお出いでになります。毎朝会社のお出いでかけにお寄りになって、その日その日の吉凶を見る方かたもあります。しかしむかしから当るも八卦はっけ、当らぬも八卦はっけという事がありますから、凶の卦けに当たってもあまりお気におかけなさらん方がよいです。お年はおいくつでいらっしやいます。」

「丁度で御在ます。」

「それでは子の年ねとしでいらっしやいますな。それからお生れになったのは。」

「五月の三日。」

「子の五月三日。さようですか。」と易者はすぐに筮竹せいちくを把とつて口の中で何か呟つぶやきながらデスクの上に算木さんぎを並べ、「お年廻りは離中断りちゅうだんの卦に当ります。しかし文字通り易の釈義を申上げてまわり廻まわりて要領を得ない事になりました。しかし文字通り易の釈義を申上げててみじかに申上げて見ましよう。大体を申上げると、この離中断の卦に当る方は男女に限らず親兄弟にはなれ友達も至って少く一人で世を渡る傾きがあります。それにあなたのお生れになった月日から見ますと、遊魂巽風ゆうこんせんふうの卦に当ります。これは一時お身の上に変った事が起つても、その変った事おおいが追々元の形に立戻るといふ卦であります。この卦から考えて見ますと、現在のお身の上は一時変った事の起つた後、追々もとのようになって行こうといふ間のように思われます。天氣に譬たとえて申上げれば暴風のあつた後、その名残りがなかなか静まらない。しかし追々しずか静かになって、やがてもとの天気になろうといふその途中だと申したらよいでしょう。」

君江は膝ひざの上に肩掛かたかけを弄もてあそびながらぼんやり易者の顔を見ていたが、そ

の判断は全くその身に覚えがない事ではない。どこか当たっている処があるので、何となく気まりのわるいような心持で再び伏目になった。一時身の上に変った事があつたと言うのは、大方おおかた両親の意見をきかず家を飛出し、東京へ来て、とうとう女給になった事だろうと思つたのである。

君江が家を出たわけは両親はじめ親類中ちゅうじゆ挙つて是非にもと説き勧めた縁談を避けようがためであつた。君江の生れた家は上野停車場ていしやばから二時間ばかりで行かれる埼玉県下の丸円町にあつて、その土地の名物になつている菓子をつくる店である。君江は小学校の友達の中で、一時牛込うしごの芸者げいしやになり、一年たつたため中身受うちみうけをされて、人の妾めかけになつていた京子という女と絶えず往来ゆききをしていたので、田舎者の女房などになる気はなく、家を逃げ出してそのまま京子の家に厄介やくかいになつた。田舎から迎いの人が来て、二、三度連れ戻されてもまたすぐ飛出す始末。親たちも困りぬいて、君江の我儘わがままを通させ銀行か会社の事務員になる事を許した。

君江は京子の旦那になつている川島という人の世話で、間もなく或保ある険会社に雇われたものの、これは一時実家へ対しての申訳もうじわけに過ぎないので、半年とはつづかず、その後はごぶらぶら京子の家に遊んで日を暮している中、突然京子の旦那は会社の金を遣込つかいこんだ事が露見して検事局へ送られる。京子は芸者に出でいた頃のお客をそのまま妾宅しよたくへ引込みひきこ、それでも足りない時は知合まちあいいの待合まちあいや結婚媒介所を歩き廻つて、結句何不自あ由もなく日を送っているのを、傍そばで見ている君江もいつかこれをよい事にしてその仲間にはいつた。しかし何分にもその筋の検拳がおそろしいので、京子はもとの芸者になろうと言出いす。君江もともども芸者はどんなものか一度はなつて見たいと思ひながら、鑑札を受ける時所轄の警察署から実家へ問合せとの手続をする規定のある事を知つて、やむことをえず女給になつた。

京子は田舎の家へ仕送りをしなければならぬ身であるが、君江はそんな必要がない。田舎に育っただけそれほど流行はやりの物に身を飾る心もなければ、芝居や活動のような興行物も、人から誘われないかぎり、自分から進んで見に行こうとはしない。小説だけは電車の中でも拾い読みをするほどであるが、その他ほかには自分でも何が好きだかわからないと言っている位で、結局貸間の代と髪結かみゆいせん銭さえあれば、強いて男から金など貰もらう必要がない。金などは貰わずに、随分男のいうままになってやった事もあるほどなので、君江は今までいかほど淫恣いんしな生活をして来ても、人からさほど怨うらみを受けるようなはずはないと思ひ込んでいる。占者の説明を待つて、

「それでは今のところ別にたいして心配するようなことはないんで御在ございますね。」

「御健康はいかがです。現在別に御おわるいところがないのなら、無論近い将来にもさして病難があるとは思われません。現在は唯ただいま今も申上げたように波瀾はらんのあつた後むしろ無事で、いくらか沈滞しんたいというような形もあります。御自分ではお気がつかないでいらつしやるかも知れませんが、何か知ら不安で、おちつかないような気がなさるのかも知れませんが。しかし易の卦では唯今申上げたように一時の変動が追々静まつて行くのですから、これから先たいした事件が起ろうとは思われません。しかし何か御心配な事があつて、その事をどうしたらいいかと思召おほしめすなら、その特別な事について、もう一度見直しましょう。それで大抵お心当りがつくだろうと思います。」と易者は再び筮竹を取り上げた。

「実はすこし気にかかる事が御在まして。」と君江は言いかけたが、まさかに黒子くろこの事は明らさまには言出しにくいので、「自分には別に覺おぼえがないんですけれど、誰かわたくしの事を誤解している人がありはしない

かと思うような事が御在ます。」

「はい。はい。」と易者は仔細らしく眼を閉じて再び筮竹を数え算木を置き直して、「なるほど。この卦は物に影の添う事を意味します。して見ると、何か御自分でいろいろ思いすごしをなさるのですな。それがためない事もあるように思われて来ます。唯今の言葉で申すと幻影と実体ですな。物があつて影の生ずるのが自然でありますが、時と場合には、それとは反対に影から物の起ることもあります。それ故まず影をなくすようになされば、自然と物事は落つく処へ落つて行くわけで。そういう御心持でいらつしやれば、別に御心配には及ばないと思います。」

君江は易者のいう事を至極尤だと思つたと、自分ながらつまらない事に気に掛けていたと、忽ち心丈夫な氣になつてしまつた。それでもまだ何やらきいて見たいような心持がしながら、しかしあまり微細な事まで問掛けて、それがため現在の職業はまだしもの事、二、三年前京子と二人で待合や媒介所を歩き廻つた事まで知られてはと、底氣味のわるい心持もする。猫の死骸や櫛のなくなつた事もきいて見ようとは心づきながら、カツフェーへ行く時間が氣になるので、今日はこのまま立去ろうと考え、「失礼ですが、御礼は。」といいながら帯の間へ手を入れる。

「壹円いただく事にしておりますが、いかほどでも思召して宜しいのです。」

出入口の戸があいて、洋服の男が二人無遠慮に君江の腰をかけているすぐ側の椅子に坐つたのみならず、その一人はぎよろりとした眼付の、どうやら刑事かとも思われる様子に、君江は横を向いたまま椅子から立つて、易者にも挨拶せず、戸を明けて廊下へ出た。

建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡つた日かげに、日比谷公園から堀端一帯の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの

中から流行の衣裳の翻えるのが目に立って見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通りぬけて、数寄屋橋のたもとへ来かかると、朝日新聞社を始め、おちこちの高い屋根の上から広告の軽気球があがっているので、立留る気もなく立留って空を見上げた時、後から君江さんと呼びながら馳け寄る草履の音。誰かと振返れば去年池の端のサロンラックで一緒に働いていた松子という年は二十一、二の女で。その時分にくらべると着物も姿もずっと好くなっている。君江は同じ経験からすぐに察して、

「松子さん。あなたも銀座。」

「ええ。いいえ。」と松子は曖昧な返事をして、「去年の暮、暫くアルプスにいたのよ。それから遊んでいたの。だけれどまたどこかへ出たいと思って実はこれから五丁目のレーニンっていう酒場。君江さんも御存じでしょう。あの時分ラックにいた豊子さんがいるから、ちょっと様子を見て来ようと思っているの。」

「そう。あなた、アルプスにいたの。ちつとも知らなかったわ。わたしはあれからずっとドンフワンにいるわ。」

「この春だったか、アルプスでお客様から聞いたことがあったわ。お逢いしたいと思ってもついで時間がありません。あの、先生もお変りがないくつて。」

君江は小説家清岡進の事にちがいないとは思いつつ、数の多いお客の中には、弁護士や先生もあれば、医者や先生もあるので、それとなく念を押すに若くはないと、「ええ。この頃は新聞の外に映画や何かで大変おいそがしいようだわ。」

松子はこれを何と思いつたのか、「アラ、そう。」といかにも感に打たれたらしく深く息を呑んで、「男はいざとなると薄情ねえ。わ



たし面白い経験をしたのよ。だから今度は大に発展してやろうと思ってるのよ。」

君江は心の中で高が五人か十人、数の知れた男の事を大層らしく経験だの何だの言うにも及ぶまいと、可笑しくなつて来て、からかい半分、わざと沈んだ調子になり、「あの先生には立派な奥様はあるし、スターで有名な玲子さんがあるし、わたし見たような女給なんぞは全く一時的の慰み物だわ。」

橋を渡ると、人通りは尾張町へ近くなるに従つて次第に賑かになる。それにもかかわらず松子は正直な女と見えて、たちまち 怒激した調子になり、「だって、玲子さんが結婚したのは、先生が君江さんを愛したためだつていう評判よ。そうじゃないの。」

君江はあたりを憚らぬ松子の声に辟易して、「松子さん。その中ゆつくり会つて話しましょうよ。何なら、ちよつとお寄んなさいな。ドンフワンでも募集しているから紹介してもいいわ。」

「あすこは今幾人いて。」

「六十人で、三十人ずつ二組になつてゐるのよ。掃除はテーブルも何も彼も男の人がするから、それだけ他よりも楽だわ。」

「一日に幾番くらい持てるの。」

「そうねえ。この頃じゃ三ツ持てればいい方だわ。」

「それで、綺羅を張つたら、かつかつねえ。自動車だつて一度乗ると、つい毎晩になつてしまふし……。」

君江はこまこましました世智辛いはなしが出ると、他人の事でもすぐに面倒でたまらなくなる。それにまた、金なんぞはだまつていても無理やりに男の方から置いて行くものと思つてゐるので、人込の中に隔てられたまま松子の方には見向きもせず、日の光に照付けられた三越の建物を眩

しそうに見上げながら、すたすた四辻よつじを向側へと横ぎってしまつたが、少しは気の毒にもなつて、後を振返つて見ると、松子は以前の処に立止つたまま、挨拶あいさつのしるしに遠くからちよつと腰をかがめ、それでもう安心したという風で、これも忽ち人通りの中に姿を没した。

「#5字下げ」二「#「二」は中見出し」

松屋呉服店から二、三軒京橋きょうばしの方へ寄つたところに、表附おもてつきは四間間口の中央に弧形ゆみなりの広い出入口を設け、その周囲にDONJUANという西洋文字を裸体の女が相寄つて捧げている漆喰細工しっくいざいこう。夜になると、この字に赤い電気がつく。これが君江の通勤しているカツフェーであるが、見渡すところ殆ど門並かどなみ同じようなカツフェーばかり続いていて、うっかりしていると、どれがどれやら、知らずに通り過ぎてしまつたり、わるくすると門かどちがいをしないと限らないような気がするので、君江はざつと一年ばかり通う身かよでありながら、今だに手前隣てまえとなりの眼鏡屋と金物屋とを目標めじるしにして、その間の路地ろじを入るのである。路地は人ひとりやつと通れるほど狭いのに、大きな芥箱こみばこが並んでいて、寒中でも青蠅あおばえが翼はねを鳴し、昼中でも鼯いたちのような老鼠ねずみが出没して、人が来ると長い尾の先で水溜みずたまりの水をはね飛とばす。君江は袂たもとをおさえ抜足ぬきあしして十歩ばかり。やがて裏通うらどおを行く人の顔も見分けられるあたり。安油あんあぶの悪臭あくくさが襲うように湧わき出してくる出入口をくぐると、何処どこという事なく蠹虫かまじむしのぞろぞろ這はい廻まわっている料理場である。料理場は後あとから建て増したものらしく、銀座通に面した表附とはちがって、震災当時の小屋同然、屋根も壁もトタンの海鼠板なまこいた一枚

で困つてあるばかり。それでも土間から急な梯子段を土足のまま登つて行くと、十畳ばかり畳を敷いた一室があつて、四方の壁際ぐるりと十四、五台ばかりも鏡台が並べてある。丁度三時五、六分前。十畳の一室は、朝十一時から店へ出ていた女給と、今方来たものとの交代時間で、坐る場所もないほど混雑している最中。鏡一台の前にはいずれも女が二、三人ずつ繡眼児押しに顔を突出して、白粉の上塗をしたり髪を直したり、あるいは立って着物を着かえたり、大胡坐で足袋をはき替えたりしているのもある。

君江は豎シボの一重羽織をぬいで肩掛と一つにして風呂敷に包んだ。そして廊下への出口に置いてある衣裳棚に、名前の貼紙がしてある処を見てその包を載せ、コンパクトで鼻の先を叩きながら、廊下づたいにパツリイを通り抜けると、丁度店二階の方から歩いて来る春代という女に出逢つた。帰り道が同じ四谷の方角なので、六十人いる朋輩の中では一番心安くなっている。

「春さん。昨夜はグレたんじやないの。後で何かおこつてよ。」

「それアあなたでしょう。わたし随分待つていたのよ。今夜はきつと一緒に帰りましょう。その方が経済だからねえ。」

君江はそのまま表二階の方へ行きかけると、階段の下から下足番をしている男ボーイが、「君江さん、電話です。」と頻に呼んでいる声が聞えた。

「はアイ。」と大声に答えながら、口の中で「誰だろう。いけすかない。」とつぶやきながら、テーブルや植木鉢の間を小走りに通り抜けて階段を下りて行った。

階下は銀座の表通から色硝子の戸をあけて入る見通しの広い一室で、坪数にしたら三、四十坪ほどもあるうかと思われるが、左右の壁際には

衝立の裏表に腰掛と卓子とをつけたようなボックスとかいうものが据え並べてあつて、天井からは挑灯に造花、下には椅子テーブルに植木鉢のみならず舞台上で使う藪置のような植込が置いてあるので、何となく狭苦しく一見唯ごたごたした心持がする。正面の奥深い片隅に洋酒を棚に並べた酒場があつて、壁に大きな振り時計、その下に帳場があり、続いて硝子戸の内に電話機がある。君江は行きちがう人ごとに笑顔をつくりながら、電話室へ駆け込み、「もしもしどなた。」ときくと、電話は君江を呼んだのではなく、清子という女給の聞きちがえであつた。

爪先で電話室の硝子戸を突きあげ、「清子さん。電話。」と呼びながら君江は反身に振返つてあたりを見廻したが、昼間のことで客はわずかに二組ほど、そのまわりに女給が七、八人集っているばかり。植木の葉かげを透して見ても清子の姿は見えない。誰やらが「清子さんは早番でしょう。」という。君江はその通り電話の返事をして硝子戸の外へ出ると、その姿を見て、洋服をきた中年の痩せた男が帳場の台に身を寄せたまま、「君江さん。」と呼留めて、「どうしました。占いは。」

「たつた今、見てもらつたわ。」

「どうでした。やっぱり男のおもいでしょう。」

「それなら見てもらわなくつても覚えがあるはずじゃないの。もうそんな景気じゃないわ。小松さん。わたし大に悲観しているのよ。」

「へえ。君江さんが……。」と小松といわれた男は円顔の細い目尻に皺をよせて笑う。年はもう四十前後。神田の何とやらいうダンスホールの会計に雇われている男で、夕方六時に出勤する頃まで、毎日懇意なカツプエーを歩き廻つて女給の貸間をはじめ、質屋の世話、芝居の切符の取次など、何事にかぎらず女の用を足してやって、皆から小松さん小松さんと重宝がられるのをこの上もなく嬉しいことにしている男である。い

や味な事は言わないかわり、お客になつて飲み食いもした事がない。以前はどこかの箱屋はこやだともいうし役者の男衆おとこしゅうだったという噂うわさもある。君江はこの男から日比谷の占者のことをきいたのである。

「君江さん。どうでした。何か手がかりがありましたか。」

「さア。何だか、いろいろな事を言われたけれど、何の事だかわけがわからないのよ。わたしの方でも別に何ともきいては見なかつただけだ。」「

「それじゃ駄目だ。君江さんと来たら実にのん気だからな。」

「壹円損いちえんしたわ。」と君江は人に問われて始めて占者の判断の甚要領はなはだを得ていなかった事と、自分のきき方も随分不熱心であつた事に心づいた。最少もすこし向むかひの困こむるくらい委くわしくこまかい事まできけばよかつたという気がした。

「でもねえ、小松さん。当分今の通りで別条はないんですとさ。覚えているのはそれツきりよ。いろんな事を言われたけれど『何が何だかわからないのヨ』なのよ。まったくさ。何しろ占を見てもらうのは生れて始はじてでしょう。見てもらいつけないと駄目なものねえ。占もやっぱり聞きか方かたがあるんじゃないか知ら。」

「占いかたはあつても、別に聞き方はないでしょう。」

「それでも、お医者さまでも始めて見てもらう時には、いろいろこつちから言わなくつちや、いけないツていうじゃないの。だから占や何かでもやっぱりそうだろうと思うわ。」

表梯子おもてはしこの方から蝶子ちようこという三十越したでつぶりした大年増おおとしまが拾円紙幣じゅうえんを手にして、「お会計を願います。」と帳場の前へ立ち、壁の鏡にうつる自分の姿を見て半襟はんえりを合せ直しながら、

「君江さん。二階にがいに矢やさんがいてよ。行つておあげなさいよ。うるさい

から。」

「さつき見掛けたけれど、わたしの番じゃないから降りて来たのよ。あの人が、先に辰子さんのパトロンだつて、ほんとうなの。」

「そうよ。日活の吉さんに取られてしまったのよ。」とはなし出した時、会計の女が伝票と剰銭とを出す。その時この店の持主池田何某という男に事務員の竹下というのが付き随い、コック場へ通う帳場の傍の戸口から出て来る姿が、酒場の鏡に映った。蝶子と君江とは挨拶するのが面倒なので、さつさと知らぬふりで二階の方へ行く。池田というのは五十年配の齒の出た貧相な男で、震災当時、南米の植民地から帰つて来て、多年の蓄財を資本にして東京大阪神戸の三都にカフェーを開き、まず今のところでは相応に利益を得ているという噂である。

表梯子から二階へ上った蝶子は壁際のボックスに坐っている二人連れの客のところへ剰銭を持って行き、君江は銀座通を見下す窓際のテーブルを占めた矢さんというお客の方へと歩みを運びながら、

「いらつしやいまし。この頃はすっかりお見かぎりね。」

「そう先廻りをしちやアずるいよ。先日はどうも、すっかり見せつけられました。あんなひどい目に遇つた事は御在ません。」

「矢さん。たまにやア仕方がないことよ。」と愛嬌を作つて君江は膝頭の触れ合うほどに椅子を引寄せて男の傍に坐り、いかにも懇意らしく卓の上に置いてある敷島の袋から一本抜取つて口にくわえた。

矢さんというのは赤阪溜池の自動車輸入商会の支配人だという触込みで、一時は毎日のように女給のひまな昼過ぎを目掛けて遊びに来たばかりか、折々店員四、五人をつれて晚餐を振舞う。時々これ見よがしに芸者をつれて来る事もある。年は四十前後、二ツはめているダイヤの指環を抜いて見せて、女たちに品質の鑑定法や相場などを長々と説明すると

いうような、万事思切つて齒の浮くような事をする男であるが、相応に金をつかうので女給連は寄つてたかつて下にも置かないようにしている。君江は既に二、三度芝居の切符を買つてもらつたこともあるし、休暇時間には松屋へ行つて羽織と半襟を買つてもらつたこともあるので、この次どこかへ御飯でも食べに行こうと誘われれば、その先は何を言われても、そう情なく振切つてしまふわけにも行かない位の義理合いにはなつてゐる。それ故矢さんからひやかされたのを、なまじ胡麻化すよりも明さまに打明けてしまつた方が、結句面倒でなくてよいと思つたのである。矢さんは内心むつとしたらしいのを笑いにまぎらせて、

「とにかく羨しかつたな。罪なことをするやつだよ。」とテーブルの周囲に集つてゐるお民、春江、定子など三、四人の女給へわざとらしく冗談に事寄せて、「お二人でお揃いのところを後からすっかり話をきいてしまつたんだからな。人中なのに手も握つていた。」

「あら、まさか。そんなにいちやいちやしたければ芝居なんぞ見に行きやアしないわ。わきへ行くわよ。」

「こいつ。ひどいぞ。」と矢さんは撲つまねをするはずみにテーブルの縁にあつたサイダアの壘を倒す。四、五人の女給は一度に声を揚げて椅子から飛び退き、長い袂をかかえるばかりか、テーブルから床に滴る飛沫をよける用心にと裾まで摘み上げるものもある。君江は自分の事から起つた騒ぎに拠所なく、雑巾を持って来て袂の先を口に啣えながら、テーブルを拭いてゐる中、新しく上つて来た二、三人連の客。いらつしゃいましと大年増の蝶子が出迎えて「番先はどなた。」と客の注文をきくより先に当番の女給を呼ぶ金切声。「君江さんでしょう。」と誰やらの返事に君江は雑巾を植木鉢の土の上に投付けて「はい。」と言いなから、新来のお客の方へと小走りにかけて行つた。

客は二人とも髭を生した五十前後の紳士で、松屋か三越あたりの帰らしく、買物の紙包を携え、紅茶を命じたまま女給には見向きもせず、何やら真面目らしい用談をしはじめたので、君江はかえってそれをよい事に、ひまな女たちの寄集っている壁際のボックスに腰をかけた。テーブルの上には屑羊羹に塩煎餅、南京豆などが、袋のまま、新聞や雑誌と共に散らかし放題、散らかしてあるのを、女たちは手先の動くがまま摘んでは口の中へと投げ入れているばかり。活動写真の評判や朋輩同士の噂にも毎日の事でもう飽きている。睡気がさしてもさすがここでは居睡りをするわけにも行かないらしく、いずれも所業なげに唯時間のたつのを待っているという様子。その時隅の方でひとり雑誌の写真ばかり繰りひろげて見ていた女が、突然、

「アラ、実にシャンねえ。清岡先生の奥様よ。」という声に、ボックスに休んでいた女は一斉に顔を差出した。君江も屑羊羹を頬張りながら少し及腰になって、

「どれさ。見せてよ。わたしまだ知らないんだからさ。」

「はい。よく御覧なさい。」と以前の女が差付ける雑誌の挿絵。見れば、縁側に腰をかけている夫人風の女の姿で、「名士の家庭。」「作家清岡進先生の御夫人鶴子さまのお姿。」としてあった。

「君江さん。あんた、何ともない事。そんなもの見て。わたしなら破いてしまいたくなるわ。」と写真の上に南京豆を打ちつけたのは、もと齒医者で生活難から女給になった鉄子である。

「あなた。随分焼餅やきねえ。」と君江はかえって驚いたように鉄子の顔を見返して、「いいじゃないの。奥様なら奥様で。気にしないで。」

「君江さんは全く徹底しているわ。」とダンス場から転じてカツフェー



に来た百合子というのが相槌を打つと、もとは洋髪屋の梳手であつた瑠璃子というのが、

「とにかく一番幸福なのは清岡さんよ。令夫人はシャンだし、第二号は銀座における有名なる女給さんだし……。」

「ちよいと何が有名なのさ。止して頂戴よ。」と君江はわざとらしく憤然と椅子を立つて、先刻から打捨てて置いた自動車商会の矢田さんの方へと行ってしまった。女たちは無論戯れとは知りながら、少し心配したように斉しくその後姿を見送つたが、瑠璃子はもともと梳子の時分ないない私娼窟に出没して君江とも一、二度言葉を交えた間柄。偶然このカツプエーで邂逅しても、互に默契する処があるらしく秘密を守り合つていくくらいなので、何を言つてもまた言われても互に気を悪くするはずはないと、平気な顔で、折からテーブルを叩くらしい音がするのを聞きつけ、自分が持番の客ではないかと、音する方へ目を注ぐ。丁度その途端、階段から上つて来る新しい客の洋服姿が向の壁の鏡に映つたのを早くも認めて、「アラ清岡先生よ。」と瑠璃子は小声で一同に知らせた。

「先生。くしゃみが出なかつて。」と君江とは仲の好い春代が逸早く駈寄つて、「あつちのボックスがいいわよ。」と洋服の袖に縫り、人目につかない隅のボックスへ連れて行つた。これは君江を張りに来る自動車屋の矢田さんが、まだ帰らずにいるので、万一の事を用心した春代の心づかいである。

「歩いて来るともう暑い。黒ビールか何か貰おうよ。」と清岡進は抱えていた新刊雑誌と新聞紙とをテーブルの下の揚板に押入れ、新しい鼠色の中折帽をぬいで造花の枝にかけた。紺地二重ボタンの背広に蝶結のネクタイ。年の頃は三十五、六。鼻先と頤のとがっているのが目に立つので、色の白い眼の大きい頬のこけた顔立は一層神経質らしく見えるのに、

長く伸ばした髪をわざと無造作に後に掻き上げている様子。誰が目にも新進の芸術家らしく、また宛然活動写真中に現れて来る人物らしくも見える。その父は漢学者だとかいう事であるが、清岡は仙台あたりの地方大学に在学中も学業の成績は極めて不出来で、卒業の後文学者の仲間入はしたものの、つい三、四年ほど前までは、更に月旦に登るような著述もなかった。然に、何から思いついたのやら、ふと曲亭馬琴の小説『夢想兵衛胡蝶物語』を種本にして、原作の紙鷲を飛行機に改め、「彼はどこへでも飛んで行く。」という題をつけ、全篇の趣向をそのまま現代の世相に当てはめた通俗小説を執筆して、或新聞に連載した。これが偶然大当りにあたって、新派俳優の芝居や活動写真にも仕組まれ、爾来名声は藉然として、一作ごとに高くなり、今日では大抵の雑誌や新聞に清岡進の名を見ないものはないような勢になった。

「これも先生の御本。」と春代は遠慮なくテーブルの上の一冊を取り上げ口絵を見ながら、「これはまだ活動にはならないんでしょう。」

清岡はわざとうるさいような顔をして、「春さん。ちよつと電話を掛けてくれ。『丸円新聞』の編輯局に村岡がいるはずだから。京橋の丸丸番だよ。呼出してすぐにここへ来いッて。」

「村岡さんて、いつもの村岡さん。」

「そうだよ。」

「京橋の丸丸番だわね。」と春代が行きかけた時、持番の定子というのが、黒ビールと南京豆の小皿を持って来て、酌をしながら、「わたし、先生の小説には思出の深い事があるのよ。あの時分、別に役も何も付いた訳じゃないけれど、始めて蒲田へ這入ったのよ。」

「定さん。蒲田にいた事があるのか。」と清岡はコップを片手に定子の顔を斜に見上げながら、「どうして止したんだ。」

「どうしてッて。見込みがないんですもの。」

「お世辞じゃないが、定さんのような顔立なら映画には向くんだがね。監督の言う事を聴かないからだろう。女は何になっても男の後援がなくなっちゃ駄目だからな。女流作家だって少し売出すまでには、みんな背景があるんだよ。」

その時君江が巻煙草まきたばこを啣くわえながら歩いて来て、黙もくって清岡そはの側に腰をかける。春代が戻もどって来て電話の返事を伝え、そのまま腰をかけて、

「先生。何か御馳走してよ。君ちゃんは。」

「わたしこの方がいいわ。」と清岡が飲残した黒ビールのコップを取上げた。

「おむつまじい事ね。じゃア、春代さん、チキンライスか何か一緒にたべましょう。」と定子は帯の間から取出す伝票紙に注文の品を書きながら立たって行いった。

明り取りの窓にさしていた夕日の影はいつか消えて、階段の下から突然蓄音機が響き出した。これが五時半になった知らせで、三時過から休んでいた女給も化粧をし直して出てくる。階上階下の電燈には残りなく灯がついて、外はまだ明あかるい夏の夕方も建物の内ばかりは早くも夜の景気である。

「#5字下げ」三「#」三「は中見出し」

帰り途みちが同じ四谷よつやの方角なので、君江と春代とは大抵每晚つれだ連立すって数寄屋橋きやばしあたりから円タクに乗る。銀座通では人目に立つのみならず、そ

の辺にはカッフェーを出た酔客がまだうろろう徘徊しているので、これを避けるため、少し歩きながら、通過する円タクを呼び止め、値切る上にも賃金を値切り倒して、結局三十銭位で承知する車に乗るのである。その晩二人は数寄屋橋を渡ってガードの下を過ぎ、日比谷の四辻近くまで来たが、三十銭で承知する車は一台もない。春代は腹立しげに、「何だい。馬鹿にしている。停るかと思つたら、あいつも行つてしまった。」

「いいわよ。ぶらぶら歩きましたようよ。少し酔つたから丁度いいわよ。」

「もうすっかり夏だわねえ。御堀の方を見ると、まるで芝居の背景見たようねえ。」

日比谷の四辻には電車を待つ人がまだ大分立っている。

「今夜は節約して電車に乗ろうよ。」

二人は道幅のひろい四辻を歩道から線路の方へと歩み寄ろうとした時、横合いからぬつと二人の前へ立ちふさがつた洋服の男があつたので、二人はびっくりしてその顔を見ると、今日も午後のカッフェーへ来ていたダイヤモンドの矢田さんであつた。

「まア、大変御ゆっくりねえ。どこで飲んでいらしたの。」

「送つてあげよう。」と矢田は円タクを呼びかけた。

「わたし、電車でいいのよ。お客様と自動車に乗るのはやかましいから。」と春代は体よく逃げようとする、矢田は、度々その手を食っていると見えて、

「それア銀座通のことじゃないか。ここまで来れば構やせん。僕が責任を負う。」

「あなたも節約して電車になさいよ。矢さん。」と君江は丁度来かつた赤電車の方へとすたすた行きかけたので、矢田はとやかく言っている暇もなく、二人の後について新宿行の電車に乗つた。

案外すいている車の中には、二人の知らない他の店の女給が三人ばかりに、男が五、六人。いずれも居眠りをしている。半蔵門を過ぎて四谷見附みつけに来かかる時まで、矢田はさすがにおとなしく、連れではないような風をして口もきかずにいたが、君江が春代を残して一人車から降りかけるのを見るや否や、あわててその後について来て、

「君江さん。もう乗換のりかえはないぜ。自動車を呼ぼう。」

「いいのよ。すぐ其処そこですから。」と君江は人通ひとどおりの絶えた堀端ほりばたを本村町ほんむらぢやうの方へと歩いて行く。円タクの運転手が二人の姿を見て、窓から手を出し指で賃銭の割引を示すものもあれば、垢あかじみた顔を出してひやかすものもある。矢田はびったり寄添い、

「君江さん。どうしても家うちへ帰らなくっちゃいけないのか。一晩ぐらい都合できないのか。エ、君江さん。どうしてもいけなければ、一時間で、三十分でもいい。話をしてすぐ別れてもいいから、ちよつとつき合ってくれ。僕はそんな無理なことは決して言わない。今夜の中にきつと帰すから。」

「もう晩おそすぎるわよ。ぐずぐずしていると、わたし帰れなくなってしまつから。それに明日あしたは早番だから。」

「早番だつて、あすこは十一時じゃないか。こんな事を言つてぐずぐずしている中うちに時間がたつてしまふじゃないか。この近辺はいけないのか。荒木町あらかちやうか、それとも牛込うしごめはどうだ。」と矢田は君江の手を握つて動かない。  
い。

土手上的の道路は次第に低くなって行くので、一歩しあといごとに夜の空がひろくなつたように思われ、市ヶ谷いちがやから牛込の方まで、一目に見渡す堀の景色は、土手も樹木も一様に蒼あおく霧のようにかすんでいる。そよそよと流れて来る夜深よふけの風には青くさい椎しいの花と野草の匂においが含まれ、松の聳そびえた

堀向の空から突然五位鷲のような鳥の声が聞えた。

「アラ。何だか田舎へ行ったようねえ。」と君江は空を見上げた。矢田はすかさず、

「どこか静な処へ行こうじゃないか。一晚位犠牲におしよ。僕のために。」  
「矢さん。もしか目付かって、ごたごたしたら、あなた。あの人の代りになってくれること。わたし、実はもうカップフィーなんかよしたいと思っているの。」と君江は矢田の心を引いて見るつもりで、わざと身を摺り寄せながら静に歩き出した。実は今夜連れられて行った先で、矢田が気前好く祝儀を奮発するかどうかを確めて置こうと思っただけである。

「あの人ツて、誰だ。この間一緒に邦楽座へ行った人か。」

「いいえ。」と言いかけて君江は心づき、「え、そうよ。あの人よ。」と狼狽えて言直した。邦楽座へ一緒に行ったのは旦那でも恋人でも何でもない。つまり矢田さんと同様なその場かぎりのお客なのである。

「そうか。あの人が君さんの旦那なのか。」と矢田はすっかり本気にして、「しかし、今まで世話をしている関係があっちゃア、そう急によしてしまふ訳には行かないだろう。恨まれるのはいやだからな。」

君江は噴き出したくなるのを耐えて、「ですからさ。もしも、万一の事があつたらツて言うのよ。知れると面倒だから、今夜の事は誰にも絶対に秘密よ。」

「そんな事は心配しないだつて大丈夫だよ。まさかの時にはきつと僕が引受ける。」と矢田はまず今夜だけはいよいよ自分のものになった嬉しさ。人通のない堀端を幸に、いきなり抱き寄せて女の頬に接吻した。

本村町の電車停留場はいつか通過ぎて、高力松が枝を伸している阪の下まで来た。市ヶ谷駅の停車場と八幡前の交番との灯が見える。

「あすこの交番はうるさいのよ。すこしおそくなると、いろいろな事を聞くから、車に乗りましょう。」

矢田はこの機逸すべからずと、あたりを見廻したが、折悪しく円タクが通らないので、二人はそのまま立止った。

「わたしの家はすぐ其処の横町だわ。角に薬屋があるでしょう。宵の中には屋根の上に仁丹の広告がついているからすぐわかるわ。わたしこの荷物を置いて来るから待っててヨ。」

「おい。君さん。大丈夫か。すっぱかしはあやまるぜ。」

「そんな卑怯な真似しやしないわヨ。心配なら一緒にそこまでいらっしやいよ。わたしが帰らないと、いつまでも下のおばさんが鍵をかけずに置くから。」

高力松の下から五、六軒先の横町を曲ると、今までひろびろしていた堀端の眺望から俄に変わる道幅の狭さに、鼻のつかえるような気がするばかりか、両側ともに屋並の揃わない小家つづき、その間には潜門や生垣や建仁寺垣なども交っているが、いずれも破れたり枯れたりしているの、あたりは一層いぶせく貧し気に見える。君江は軒先に魚屋の看板を出した家の前まで来て、「ここで待っていらっしやい。」と言いつて、魚屋の軒下から路地へ這入った。矢田はすぐにその後について行こうとしたが、君江の感情を書しはせぬかと遠慮して、暫く首をのばして真暗な路地の中をのぞくと、がたりがたりといかにも具合のわるそうな潜戸の音がしたので、いくらか安心はしたものの、どうも、様子が見届けてならぬところから、一歩二歩とだんだん路地の中へ進み入ると、忽ち雨だれか何かの泥濘へぐっすり片足を踏み込み、驚いて立戻り、魚屋の軒燈をたよりに半靴のどろを砂利と溝板へなすりつけている。間もなく、君江は出て来て、

「アラ、どうしたの。」

「イヤ、ひどい道だ。馬鹿にくさい。猫か犬の糞くそだろう。」

「だから、外で待っていらつしやいッて言つたんじやないの。ほんとに臭くさいわ。あなた。」と君江は寄添う矢田からその身を離して、「わたし、草履ぞうりだから、足袋たびへくつ付けちゃ、いやヨ。」

矢田は歩きながら、砂利に靴の裏をこすりこすりもとの堀端へ出ると、丁度曲角まがりかどの軒下すきに薪まきと炭俵すみだわらとが積んであつたのでやっとな靴の掃除をし終つた時、呼びもしない円タクが二人の前に停とまつた。

「神楽阪かぐらさか。五十銭。」と矢田は君江の手を取つて、車に乗り、「阪の下で降りよう。それから少し歩こうじやないか。」

「そうねえ。」

「今夜は何となく夜通し歩きたいような気がするんだよ。」と矢田は腕をまわして軽く君江を抱き寄せると、君江はそのまま寄りかかつて、何も彼も承知していながら、わざと、

「矢さんヤア。一体どこへ行くの。」ときいた。

矢田の方でも随分白ばツくれた女だとは思ひながら、その経歴については何事も知らないの、表面は摺すれていても、その実案外それほどはないのかという気もするので、この場合は女の仕向けるがまま至極おとなしい女給さんとして取扱つていれば間違ひはないと、君江の耳元へ口を寄せて、「待合まちあいだよ。」と囁ささき聞かせ、「差しつかえはないだろう。今夜は晚おそいからね。僕の知ってる処がいいだろう。それとも君江さん。どこか知っているなら、そこへ行こう。」

思いがけない矢田の仕返しに、さすがの君江も返事に困り、「いいえ。何処どこだつてかまわないわ。」

「じゃ、阪下で降りよう。尾沢カッフェーの裏で、静な家を知っている



から。」

君江はうなずいたまま窓の外へ目を移したので、会話はそのまま杜絶える間もなく車は神楽阪の下に停った。商店は残らず戸を閉め、宵の中間な露店も今は道端に芥や紙屑を散らして立去った後、ふけ渡った阪道には屋台の飲食店がところどころに残っているばかり。酔った人たちのふらふらとよろめき歩む間を自動車の馳過る外には、芸者の姿が街をよこぎって横町から横町へと出没するばかりである。毘沙門の祠の前あたりまで来て、矢田は立止って、向側の路地口を眺め、

「たしかこの裏だ。君江さん。草履だろう。水溜りがあるぜ。」

石を敷いた路地は、二人並んでは歩けないほどせまいのを、矢田はただに一人先に立つて行ったら君江に逃げられはせぬかと心配するらしく、ハメ板に肱や肩先が触るのもかまわず、身を斜にしながら並んで行くと、突当りに稲荷らしい小さな社があつて、低い石垣の前で路地は十文字にわかれ、その一筋はすぐさま石段になつて降り行くあたりから、その時静な下駄の音と共に襖を取った芸者の姿が現れた。二人はいよいよ身を斜にして道を譲りながら、ふと見れば、乱れた島田の髻に怪し気な癖のついたのもかまわず、歩くのさえ退儀らしい女の様子。矢田は勿論の事。君江の目にも寐静つた路地裏の情景が一段艶しく、いかにも深げ渡った色町の夜らしく思いなされて来た見え、言合したように立止って、その後姿を見送った。それとも心づかぬ芸者は、稲荷の前から左手へ曲る角の待合の勝手口をあけて這入るが否や、疲れ果てた様子とは忽ち変わった威勢のいい声で、「かアさん。もう間に合わなくなつて。」

君江は耳をすましながら、「矢さん。わたしも芸者になろうと思つたことがあるのよ。ほんとうなのよ。」

「そうか。君江さんが。」と矢田はいかにもびっくりしたらしく、その

事情をきこうとした時、早くも目指した待合の門口へ来た。内にはまだ人の氣勢がしていたが、門の扉の閉めてあるのを、矢田は「おいおい」と呼びながら敲くと、すぐに硝子戸の音と、下駄をはく音がして、

「どなたさま。」と女の声。

「僕。矢さんだよ。」

「あら、大変御ゆつくりねえ。」と門の扉を明けた女中は、君江の姿を見て、いくらか調子を改め、「さア、どうぞ。」

女中は廊下の突当りから、廁らしい杉戸の前を過ぎて、瓦塔口の襖をあけ、奥まった下座敷の四畳半に案内した。今しがたまでお客がいたものと見え、酒のかおりと共に、煙草の烟も籠ったままで、紫檀の卓の溝には煎豆が一ツ二ツはさまっていた。女中は片隅に積み載せた座布団を出し、「ただ今綺麗にいたします。やっと今方片づいた処なんで御在ますよ。」

「大した景気だな。」

「いいえ。相変わらずで仕様が御在ません。」と女中はお定まりの茶菓を取りにと立って行く。

「すこし明けようじゃないか。」

「蒸し蒸しするわねえ。」と君江はいざりながら手を伸して障子を明けると、土庇の外の小庭に燈籠の灯が見えた。

「あら、いいわね。芝居のようだわ。」

「カップフィーとはまた別だな。これが江戸趣味ツていうんだらうな。」と矢田は沓脱石の上に両足を投出して煙草へ火をつけた。

植込を隔てて隣の二階の窓が見える。簾がおろしてあるが障子の上に、島田に結った女が立って衣服をぬいでいるらしい影のありあり映っているのを見て、君江はそつと矢田の袖を引いたが、それと同時に艶しい影

は雲のように大きく薄くなつたまま消え去つて、かすかな話声ばかりになつた。矢田は何の事やら気がつかなくなつたらしく、石の上に両脚を踏みのばしたまま洋服の上着を脱ぎ、ネクタイを解きかけたが、君江は女中が茶を運び、続いて浴衣ゆかたを持って来る時まで、そのままぼんやり隣の方を眺めていた。何ともつかず、突然君江は待合というところへ初めて連れ込まれた時の事を憶い出したからである。場処は牛込ではなく、大森であつたが、中庭を隔てた植込の彼方かなたに二階の灯影ほかげを見ながら男と二人縁側に腰をかけて、女中が仕度するのを待っていたその場の様子は今夜と少しも変りがない。変つたのは自分の心持ばかり。その時分恐しかったり珍しかったりした事は、もう馴なれた上にも馴れきつて、何とも思わなくなつてしまつた。

「君さん。何かたべるか。もう支那蕎麦しなそばぐらいしか出来ないとき。」

矢田の声に君江は振返ると、洋服を浴衣にきかえ、立つてしごきを結びかけている。

「わたし、ほしくないわ。」と君江も一重羽織ひとえばおりの紐ひもを解きかけた。

女中は矢田の洋服を入れた乱箱みだればこを片隅かたぐしに運び、「今夜はどこもふさがつておりますから、お狭いでしょうけれど、ここで、どうぞ。」と床の間につづいた押入から夜具を取出したので、二人は再び濡縁ぬれえんに腰をかけて庭の方を向いた。君江の眼にはいよいよ初めての夜の事が浮んで来る。

「お風呂ふろはいつでもわいておりますから。」と女中は出て行く。

「君さん。何を考えているんだ。お着かえよ。」と矢田は心配そうに横顔を覗のぞき込んで君江の手を取つた。

君江は羽織をきたまま坐つたなりで、帯揚おびあげと帯留おびどめとをとり、懐中物を一ツ一ツ畳の上に抜き出しながら、矢田の顔を見てにつこりした。君江は三年前、家を飛出して、学校友達で人の妾めかけになつていた京子の許もとに身

を寄せ、その旦那の世話で保険会社の女事務員になって、僅一、二カ月たつたため中、早くも課長に誘惑されて大森の待合に連れられて行った。これが実際男と戯れた初めてであったが、君江はその前から京子が旦那の目をかすめていろいろな男を妾宅へ引入れるさまを目撃していたのみならず、折々は京子とその旦那との三人一ツ座敷へ寝たことさえある位で、言わば待合か芸者家の娘も同様、早くから何事をも承知しぬいていただけ、時にはなお更甚しく好奇心に駆られる矢先。課長の誘惑をよい事にしてこれに応じたまでの事である。課長は五十を越した道楽者にも似ず、その晩君江が酒も飲めば冗談も言うし、更に気まりのわるい事を知らない様子に、かえって興をさましたらしく、そこそこにその場を引上げた。それらの事を憶い返して、君江はおぼえず口の端に微笑を浮べたのを、矢田は何事も知らないので、笑顔を見ると共に唯嬉しさのあまり、カーぱい抱きしめて、

「君さん、よく承知してくれたねえ。僕は到底駄目だろうと思つて絶望していったんだよ。」

「そんな事ないわ。わたしだつて女ですもの。だけれど男の人はすぐ外の人に話をするから、それでわたし逃げていたのよ。」と君江は男の胸の上に抱かれたまま、羽織の下に片手を廻し、帯の掛けを抜いて引き出したので、薄い金紗の袷は捻れながら肩先から滑り落ちて、だんだら染の長襦袢の胸もはだけた艶しさ。男はますます激した調子になり、

「こう見えたつて、僕も信用が大事さ。誰にもしゃべるもんかね。」

「カツフェーは実に口がうるさいわねえ。人が何をしたつて余計なお世話じゃないの。」と言いながら、端折りのしごきを解き棄て、膝の上に抱かれたまま身をそらすようにして仰向きに打倒れて、「みんな取つて頂戴、足袋もよ。」

君江はこういう場合、初めて逢った男に対しては、度々馴染を重ねた男に対する時よりもかえって一倍の興味を覚え、思うさま男を悩殺して見なければ、気がすまなくなる。いつからこういう癖がついたのかと、君江は口説かれていた最中にも時々自分ながら心付いて、途中で止めようと思いつながら、そうなるとかえって止められなくなるのである。美男子に対する時よりも、醜い老人やまたは最初いやだと思つた男を相手にして、こういう場合に立到ると、君江はなお更烈しくいつもの癖が増長して、後になつて我ながら浅間しいと身顛いする事も幾度だか知れない。この夜、平素気障な奴だと思つていた矢田に迫まれて、君江は途中から急にその言うがままになり出したのも、知らず知らずいつもの悪い癖を出したまでの事である。

「#5字下げ」四「#「四」は中見出し」

翌日の朝、矢田と合乗りした自動車から、君江はひとり士官学校の土手際で降りて、路地の貸間に立戻つたが、鏡台の前へ坐ると、急に眠くなつて来て化粧をし直す力もなく、わずかに羽織をぬぎすてたばかり。着のみ着のまま、ごろりと横になつた。腕時計の針はまだ九時半をさしたところなので、十時まで三十分間眠るつもりで眼をつぶつたのであるが、忽ち格子戸につけた鈴の音と共に男の声のするのを聞きつけて耳をすますと、思いがけない清岡の声なので、君江はびっくりして起直つた。清岡がこの貸間へ来るのは、いつも君江がその翌日五時出の晩番に当る前の夜にきまつている。それも大抵カッフェーにいる間から予め知れ

ていることで、今日のような早出の朝、不意に尋ねて来ることは滅多にない。君江は昨夜のことが知れたのではないか。それにしてもは知れ方が早過ると、心の中では随分あわてながら、何喰わぬ顔で勢好く、

「お早いことねえ。まだ散らかしたまんまなのよ。」と梯子段を降りて行くと、清岡は丁度靴をぬいで上ったばかり。戸口を掃いていた小母さんも抜目のない狸婆と見えて、

「君江さん。おいやでも、もう一度おばさんの薬を上ってお出かけなさいましよ。昨夜はほんとにびっくりしました。」

君江はそれに力を得て、「もう大丈夫よ。きつと食合せがわるかったのねえ。」

「どうかしたのか。お腹でも下したのか。」と言いなながら清岡は二階へ上って、窓へ腰をかけた。

二階は六畳に三畳の二間つづきであるが、前桐の安筆笥と化粧鏡と盆に載せた茶器の外には殆何にもない。筆笥の上にも何一ツこまごました物も載せられていないので、二階中はいかにもがらんとして古畳と鼠壁のよごれが一際目に立つばかり。座布団も色のさめたメリンスの汚点だらけになったのが一枚、鏡台の前に置いてある外には、木綿麻の随分古ぼけた夏物が二枚壁際に投出されているばかりである。君江はいつものように鏡台の前の座布団を裏返しにして清岡にすすめると、清岡はそれを窓の敷居の上に載せ、ズボンの折目を気にしながら再び腰をかけた。

窓の下はコイルタの剥げたトタン葺の平屋根で、二階から捨てる白粉や歯磨の水の痕ばかりか、毎日掃出す塵ほこりに糸屑や紙屑もまざっている。この汚らしい屋根の彼方は、士官学校門前の通に立っている二階家の裏側で、汚い洗濯物や古毛布や赤児のおしめが干してある間から、絶えずミシンの音やら印刷機の響が聞える。これと共に士官学校の構内

で生徒の練習する号令の声、軍歌の声、喇叭ラッパの響のみならず、昼の中うちは馬場の砂烟すなけむりが折々風の吹きぐあいであいであい灰のように飛んで来て畳の上のみならず襖ふすまをしめた押入おし入れの内までじやりじやりさせる事がある。清岡は丁度去年の今頃、初めて君江に導かれてこの貸間に立寄った時から、もう少しあたりの清潔な居心地の好い処へ引越したらばと勧めていたが、君江は唯口先でばかり同意しながら、その実今日まで更に引越そうとする様子もなく、家具も一年前と同じで、その後新あらたに湯呑ゆのみ一つ買った事もないらしい。金には決して不自由していないのに、机いこも衣桁いこもなく、電気でんきの笠もかけたままで、いつまでたっても、今方引越して来たばかりだという体裁である。君江は年頃の女のように、窓に草花の鉢を置いたり、箆へらの上うへに人形や玩具を飾り立てたり、壁に絵葉書を貼ったりするような趣味は全然持っていない。とにかく一風変わった妙な女だと清岡は早くから心付いていた。

「お茶はいらない。もうそろそろ出掛ける時分だろう。」と清岡は窓から座布団と共に腰をすべらせて畳の上に胡坐あぐらをかき、「僕もこれから新しんじ宿ゆくの駅まで用事があるんだよ。それでちよいと寄って見たんだ。」

「そう。でも、お茶だけ入れましょうよ。おばさん。お湯がわいているなら頂戴ちやうだい。」と叫びながら下へ降り、すぐに瀬戸引せとびきの薬罐やかんを提さげて来た。「昨日きのう、お前、占を見てもらいに行ったんだってね。『街巷新聞』に出た黒子ほくろの一件は、誰がいたずらをしたのか当あてがついたか。」

「いいえ。当も何もつかないわ。」と君江は久須きよすの茶を湯呑につぎながら、「初めは、いろいろな事をきいて見ようと思って出かけて見たんだけれど、何だか気まわりがわるいから止よしてしまったのよ。だけれど、考かんがえるとほんとに不思議ねえ。誰も知っているはずがない事なんですもの。」

「占いでわからなければ、今度は巫女か、お先狐にでも見てもらうんだな。」

「巫女ツて何。」

「知らないのか、よく芸者なんぞが見てもらおうじゃないか。」

「わたし、占者だつて全く昨日が始てですもの。何だか馬鹿馬鹿しいよ  
うな気がするから、ああいう事はわたしには駄目よ。」

「だから、気にしない方がいいツて僕は最初からそう言ってるじゃないか。」

「でもあんまり不思議なんですもの。知れようはずのない事が知れたんですもの。まったく不思議だわ。」

「自分ばかり知れないと思つていても、世の中には案外な事があるからね。秘密はかえつて漏れやすいものさ。」と言ひ終つて清岡は自分から言過ぎたと心付き、急いで煙草を啣えながら君江の顔色を窺うと、君江の方でも何か言おうとしたのをそのまま黙つて、飲みかけた湯呑を口の方に持ち添えたまま、じろりと清岡の顔を見たので、二人の目はぴつたり出遇つた。清岡は煙草の烟にむせた風をして顔を外向け、

「何でも気にしないのが一番いいよ。」

「ほんとうねえ。」と君江の方でも心からそう思つてゐるらしく見せかけるために、声まで作つたが、それなり後の言葉が出て来ないので、湯呑の茶をゆっくり飲干して静に下に置いた。君江は昨夜矢田と神楽坂へ泊つた事は知られていないにしても、何しろ二年越しの間柄なので、何事に限らず大抵の事は清岡には知られてゐると思つてゐるが、さてどの辺まで知られてゐるか、それは君江にも当がつかない。君江は何か好い折があつたら、清岡とは関係を断つてさっぱりとして、自分の過去の事を少しも知らない新しい恋人を得たいという気にもなつてゐる。君江は



どういふ訳だか、自分の平生を人に知られている事を好まない。秘密にする必要がない事でも、君江は人に問われると、唯にやにや笑いにまぎらすか、そうでなければ口から出まかせな虚言をつく。最親しいはずの親兄弟に対しては君江が一番よそよしく決して本心を明した事がない。自分の方から好きだと思ふ男に対してはなお更の事で、その男が何か深く聞知ろうとすればいよいよ堅く口を閉じて何事をも語らない。同じ店にとめているカッフェーの女給連は、君江さんほど姿の優しいしとやかな人はないが、不断何を考えているのやらあれほど訳のわからない人もないと言われているのである。

清岡が君江を識つたのは君江が始めて下谷池の端のサロン、ラックという酒場の女給になつたその第一日の晩からであつた。清岡は始めて君江を見た時、女給をした事がないというならば、どこかで芸者をしていた女だろうと想像した。容貌はまず十人並で、これと目に立つ処はない。額は円く、眉も薄く眼も細く、横から見ると随分しゃくれた中低の顔であるが、富士額の生際が鬘をつけたように鮮かで、下唇の出た口元に言われぬ愛嬌があつて、物言う時歯並の好い、瓢の種のような齒の間から、舌の先を動かすのが一際愛くるしく見られた。この外には色の白いのと、撫肩のすらりとした後姿が美点の中の第一であろう。清岡はその晩、君江が物言いのしずかなのと、挙動の疎暴でないのを殊更うれしく思つて、纏頭は拾円奮発してその帰途をそつと外で待っていた。それとは心づかない君江は広小路の四辻まで歩いて早稲田行の電車に乗り、江戸川端で乗換え、更にまた飯田橋で乗換えようとした時は既に赤電車の出た後であつた。清岡は自動車でここまで跡をつけて来たので、そつと車を降り、偶然再会したような振りで話をしかけた。君江は問われてもはつきり住処は知らせなかつたが、唯市ヶ谷辺だと答えて、一緒に外濠を逢阪下あ

たりまで歩いて行く中、どうやら男の言うままになつてもいいような素振そぶを示した。

君江はその頃、久しく一緒に住んで共に私娼ししやうをしていた京子という女が、いよいよ小石川こいしかわ諏訪町すわちやうの家をたたんで富士見町ふじみちやうの芸者家に住込む事になつたので、泣きの涙で別れ、独り市ヶ谷ほんむらちやう本村町の貸二階へ引移り、私娼の周旋宿へ出入する事をよしていたので、一月あまりの間一晩も男に戯れる折がなかつた。夜ふけてから外へ出た事さえ稀まれだつたので、この夜久しぶり静にふけ渡つた濠端ほりばたの景色を見てさえ、何とも知れず心の浮き立つ折から、時候も丁度五月の初めで、袷あわせの袖口そでぐちや裾前すそまえから静に夜風の肌を撫なでる心持。君江は清岡の事を少壮の大学教授か何かだろうと、始めからわるく思つていながつたので、飛び立つような嬉しさをわざと押隠し、誘われるがまま気まりのわるい風をしながら、その夜は四谷荒木町きちやうの待合まちあいへ連れられて行つた。君江は新に好きな男ができると忽ち熱たちまくなつて忽ち冷めてしまうという、生れついでなまの浮気者なので、翌日も夕方近くまでいぢやついていたが、離れるのがいやさにカツプエーもそれなり休んで、井いの頭公園かしらの旅館に行き次の夜は丸子園まるこえんに明あかして三日の後、市ヶ谷の貸間まで一緒に来てやつとわかれた。

清岡は丁度その頃、一時妾めかけにしていた映画女優の玲子とやらを人に奪われ、代りの女を物色していた矢先、君江が身も心も捧げ尽したような濃厚な態度に、すっかり迷い込み、どんな贅ぜいたく沢な生活でも望む通りにさせてやるから、女給をやめるようにと勧めたが、君江は将来自分でカツプエーを出したいから、もう暫く女給をしていたと言つた。それならば本場の銀座へ出て経験をした方がよいと、池ノ端のサロンは一カ月あまりで止めさせ、半月ばかり京阪を連れ歩いた後、清岡は人を介して、銀座では屈指のカツプエーに数えられている現在のドンフワンに君江を

周旋した。間もなく入梅があげて夏になり、土用の半なつかからそろそろ秋風の立ち初める頃まで、清岡は何一つ疑う所もなく、心から君江に愛されているものとばかり思込んでいた。ところが或ある夜二、三の文学者と芝居の帰り、銀座に立寄って見ると、君江は急に心持がわるくなつたと言つて夕方から店を休んだという事を、他の女給から聞き、友達にわかれてから、一人本村町の貸間へ病氣見舞いに行こうとした時、いつも曲る濠端の横町から、突つと現われ出た女の姿を見た。まだ十二時前ではあつたが、片側町かたがわの人家は既に戸を閉め、人通りも電車も杜絶とだえがちになつた往来には円タクが馳過かけすぎるばかり。清岡は四、五間けんこちらから、白っぽい紹縮緬ろぢりめんの着物と青竹の模様の夏帯とで、すぐにそれと見さだめ、怪訝かいがのあまり、車道を横断して土手際の歩道を行きながら女の跡をつけた。女はスタスタ交番の前をも平気で歩み過るので、市ヶ谷の電車停留場で電車でも待つのかと思いの外ほか、八幡の鳥居を入れて振返りもせず左手の女阪を上つて行く。いよいよ不審に思いながら、地理に明い清岡は感づかれまいと、男の足の早さをたのみにして、ひた走りに町を迂回うかいして左内阪さかを昇り神社の裏門から境内けいだいに進入すすみいつて様子を窺うと、社殿の正面なる石段の降口に沿い、眼下に市ヶ谷見附一帯の濠を見下す崖上がけうえのベンチに男と女の寄添う姿を見た。尤もベンチは三、四台あつて、いずれも密会の男女が肩を摺寄すりよせて腰をかけていた。清岡はかえつて好都合だと、桜の木立を楯たてにして次第次第に進み寄り、君江がどんな話をしているかを窺うかがい、同時に相手の男の何者たるかを見定めようと試みた。

清岡はいかなる作者の探偵小説中にも、この夜の事件ほど探偵に成功したはなしは恐らくあるまいと、殆どその瞬間には驚愕きょうがくのあまり嫉妬しつとの怒りを発する暇がなかつたくらいであつた。男はパナマらしい帽子を冠かぶり紺地こんじの浴衣ゆかた一枚、夏羽織も着ず、ステッキを携えている様子はさして

老人とも見えなかつたが、薄暗い電燈の灯影にも口髭の白さは目に立つほどであつた。腕をまわして帯の下から君江の腰を抱きながら、

「なるほどここは涼しい。お前のおかげで、おれもいろいろな事を経験するよ。六十になつてベンチで女を待ち合はすなんて、実に我ながら意想外だ。この社殿の向に今でもきつと大弓場があるだろうが、おれも若い時分に弓をやりに来たことがあつた。それから何十年とこの石段を上つた事がない。それはそうと今夜はこれからどこへ行こうというんだね。ここのベンチでもいいよ。はははは。」と笑いながら君江の頬に接吻した。

君江は黙つて、暫くの間老人のなすがまになつていたが、やがて静にベンチから立上り着物の裾前を合せ、鬘を撫でながら、「すこし歩きましょう。」と連立つて石段を降りる。清岡は先刻君江が昇つた女阪の方へ迂回つて見えがくれに後をつけた。それとは知らない二人は話しながら堀端を歩いて行く。

「京子は富士見町へ出てから、どうだね。あの女のことだから、きつといそがしいだろう。」

「毎日昼間からお座敷があるんですつて。この間ちよいと尋ねたのよ。だけれどろくろく話をしている暇もなかつたのよ。あなた。これから寄つて見ない。いなくなつたらいなかつたで、別にかまやアしないから。」

「うむ。久しぶり、三人で夜明しするのも面白い。諏訪町の二階では実にいろいろな事をしたね。とにかくお前と京子とは実にいい相棒だよ。僕は昼間真面目な仕事をしている最中でも、ふいと妙な事を考え出すと、すぐにお前の事を思出す。それから京子の事を思出して、夢でも見ているような心持になるんだ。」

「それでも京子さんに較べれば、わたしの方がまだ健全だわねえ。」

「どつちともいえない。お前の方が見かけが素人らしく見えるだけ罪が深いよ。カフェーへ行つてから別に変つたのも出来ないかね。西洋人はどうだ。」

「銀座はあんまり評判になり過るから、そう思うようにはやれないわ。そこへ行くと芸者の方が大びらで、面倒臭くなくつていいわ。諏訪町にいる時分はほんとに面白かつたわね。」

「旦那はあれつきりか。まだ出て来ないのか。」

「そうでしょう。その後別に話が出ないから、どの道もう関係はないんでしよう。それにもともと京子さんの方じゃ、借金を返してもらつた義理があるだけで、別に何とも思つていた訳じゃないんだから。」

「今度は何て言っている。やはり京子というのか。」

「いいえ。京葉さんというのよ。」

二人は夜ふけの風の涼しさと堀端のさびしさを好い事に戯れながら歩いて新見附を曲り、一口阪の電車通から、三番町の横町に折れて、軒燈に桐花家とかいた芸者家の門口に立寄つた。夏の夜の事で、その辺の芸者家ではいずれもまだ戸を明けたまま、芸者は門口の涼台に腰をかけて話をしているのを、男はなれなれしく、

「京葉さんはいますか。」ときくと、直に家の内から、小づくりの円顔。髪はつぶしにたけなが「#「たけなが」に傍点」を結んだ女が腰の物一枚、裸体のまま上框へ出て来て、

「あら、御一緒。まあうれしいわね。わたし今帰つて来たところ。丁度よかつたわ。」

「どこかい家を教えろよ。ゆっくり話をするから。」

「そうねえ。それじゃア……。」と裸体の女は行先を男に囁くと、二人はそのまま歩いて四ツ角をまがる。

ここまで跡をつけて来て路地のかげに身をひそめていた清岡は、万事があまりに都合好く進捗して行くので、このまま中途から帰るわけには行かなくなつた。頃合いを計つて、清岡は君江のつれられて行つた同じ待合へと、振りの客になり済まして上り込み、女中には勘定を先に払つて、なりたけおとなしい若い芸者をといい付け、素知らぬ振りで寝てしまった。そして彼の見知らぬ老人が君江と京葉の二人を相手の遊びざまを思い残りなく窺つた後、翌日の朝はまだ日の照らぬ中清岡はそつとその待合を出た。しかし赤阪の家へ帰るには時間が少し早過るので、やむことをえず四番町の土手公園を歩みベンチに腰をかけて、ぼんやりとして堀向うの高台を眺めた。

清岡は三十六歳のその日まで、夢にも見なかつた事実を目撃し、これまで考えていた女性観の全然誤つていた事を知つて、嫉妬の怒りを発する力もなく、唯わけもなく鬱ぎ込んでしまった。清岡はその日まで、独り君江に限らず世間の若い女が五六十の老人に身を寄せて平気でいるのは、恋愛と性慾との不満足を忍んでひたすら生活の安定を得ようがためとばかり思込んでいたのであるが、豈図らんや。事實は決してそうでない。自分ばかりを愛していると思つていた君江の如きは、事もあるうに淫卑な安芸者と醜悪な老爺と、三人互に嬉戯して慚る処を知らない。

清岡は自分の経験と観察とのいかに浅薄であつたかを知ると共に、君江に対しては言うに言われぬ憎悪の念を覚え、このままもう二度と顔は見まいと思つた。しかしその日家へ帰つてから一ト寐入りして目をさますと、一時激昂した心も大分おちついている。それと共にこのまま何事も知らぬ顔に済してしまふのは、あまり言甲斐がなさ過ぎる。面責した上、女の口から事実を白状させてあやまらせねば、どうも気がすまない。しかしまた更に思直して見ると、君江は見掛けに似ず並大抵の女でない。

問われるままに案外無造作に白状してしまうかも知れない。それと共に自分の遊び足りない事と嫉妬を起した事などを心窃こころひそかに冷笑しないとも限らない。これは男の身に取っては浮気をされたよりも、なお更忍びがたしい侮辱である。清岡は黙殺するのも無念だし、表面は謝罪あやまって、蔭で舌を出されるのはなお更口惜くちやしいと、さまざま思案した末、やはり何事も知らぬ振りで表面は今まで通り、あくまで馬鹿にされながら、その代りいつか時節を待って、痛烈な復讐ふくしゅうをしてやるに若くはないと決心した。

清岡は多年原稿生活を営む必要上、腹心の男を二人使っている。一人は村岡といって、早稲田わせだあたりを卒業したばかりの文士で、毎月百円内外の手当を貰もらい、清岡の口述する小説を筆記して原稿を製作すると、それを駒田という五十年輩の男が新聞社や雑誌社へ売込みに行く。駒田は多年ある或新聞社の会計部に雇われていたので、原稿料の相場にも明あかるくまた記者仲間にも知己が多いので、清岡の受取るべき稿料の二割を自分の所得にする約束で働いているのである。清岡は門人同様の村岡に命じて、君江が歌舞伎座へ見物に行った帰途、安全剃刀かみそりの刃で着物の袂たもとを切らせた。尤もその衣類は清岡が買ってやったものである。暫しばくしてから清岡はこれも三越で自分が買ってやった真珠入の櫛くしを、一緒に自動車に乗った時、その降り際ぎわにそつと抜き取って見た。君江はきつと泣いて騒ぐだろうと思いの外、さして気にも留めないらしく、清岡にもまた間貸しのおばさんにも別にそんな話さえしない様子であった。

君江は極めてじだらくで、物の始末をしたことのない、不経済な女である代り、着物もそれほど着たがらない事は清岡も不断から心づいてはいたものの、かくまで無頓着だとは思っていなかった。そこで、留守の中に窃そつと猫の児この死骸しがいを押入の中に投込んで様子を見たが、これさえさほど恐怖の種にはならなかったらしいので、遂に清岡はわるくすると感

付かれるかも知れぬと危ぶみながら、君江が内股うちまたの黒子ほくろの事を、村岡にいい付けて『街巷新聞』に投書させたのであった。これは大分君江の心を不安にさせたらしいので、清岡は内心それ見ると幾分か胸のすくような心地がした。しかし一度目が覚めた後、君江の生活を探偵して見るといよいよ腹の立つ事ばかりなので、報復の手段も唯一時の悪戯いたずらではなかなか気がすまないようになる。もつと激烈な痛苦を肉体と精神とに加えてやる機会を窺うため、清岡は十分相手に油断をさせ、こちらの胸中を悟られぬよう、以前にも増してあくまで惚ほれ込んでいるような様子を示すようにしていたが、平常心の底に蟠わたかまっている怨恨えんこんは折々われ知らず言葉の端にも現われそうになるのを、清岡は非常な努力でこれを押えていなければならぬ。

今方占者のはなしから、清岡は我知らず言過ぎたと心付き狼狽うろたえて言いまぎらしたのも、実はこういう事情わけからである。このまま長く向い合つて二階にいるのはよくないと心づいて、腕時計を見ながら、いかにも驚いたように、「もう十時半だ。そこまで一緒に出かけよう。」

君江の方でも昨夜泊つたまままだ湯にさえ入らぬ身のまわりを男に見廻されるのが、何となく辛くてならないので、何はともあれ一まず外へ出るに如しくはないと考え、

「ええ。少し歩きましょう。お天気が好いと店へ行くのがいやになるわ。一日、日の目を見ずにいるんだから。」とぬぎ捨ててあつた豎たてしぼの一重羽織を引掛けて、窓の障子をしめた。

「今日十一時だと明日あしたは五時出だね。」

「ええ。だから、今夜店へいらしてよ。何処どこかゆつくり遊びに行きたいわ。いいでしょう。」

「そうだな。」と男は曖昧あいまいな返事をしながら帽子を取った。



「ねえ、遊びに行きましようよ。どの道今夜はゆつくり遊ぶ日じゃないの。」と君江は既に梯子段はしこだんの降口に出た清岡の身に寄添い、接吻してと言わぬばかりに顔を近寄せ、睫毛まつげの長い目を軽くふさいだ。

清岡は憎い仕方だとは思いつながら、もともと嫌いではない女のいかにも艶なまめかしく情を含んだ姿を見ると、その瞬間はさすがに日頃の怒りも何処へやら消え去って、生れつき売笑婦にでき上っているこういう女に対して、道徳上とやかく非難するのはあるいは過酷かも知れない。男の劣情を挑発する一種の器械だと思えば、自分の見ない処で何をしていても更に咎とがむべき事ではない。弄もてあそぶだけ弄んで随意に捨ててしまえばそれでよいのだというような心持にもなる。忽たちまち進んで、それにしてもこの女がもすこし自分の心を汲くみ分け、その身を慎しんで、自分の専有物になつてくれればという慾望が次第に強くなって来る。清岡は横を向いてさり気なく、

「とにかく夜になったら銀座で逢あおう。その時にきめよう。」

「ええ。そうして頂戴ちやうだい。」と君江は急に明あかるい顔になつて一足先にばたばたと下へ降り、おばさんの手から雑巾ぞうきんを奪い取つて、手ずから清岡の靴を拭いた。

市ヶ谷の堀端へ出る横町は人目に立つので、二人は路地から路地を抜けて士官学校の門前に出で比丘尼坂びくにざかを上つて本村町の堀端を四谷見附の方へ歩いた。昼前のことで、二人は並びながらも少し離れて話もせず、君江は日傘に顔をかくしていたが、ふとこの堀端は昨夜十二時過電車を降りてから矢田と手を引合つて歩いた同じ道だと思つと、夜と昼との相違から、君江はどうして昨夜はあんな矢田のような碌ろくでもない男の言う事をきく気になつたのだらうと、自分ながらその腑甲斐ふがいなさに厭いやな心持がした。清岡さんがそれと知つたらどんなに怒ることだらうと、日傘の

かげからそつと男の横顔を窺うと、少しは気が咎めもするし、またいかにも気の毒でならないような心持もして、これからはカツフェーの帰り道にはなりたけ慎しんでその場かぎりの浮気は起すまいという気にもなる。せめての申訳というではないが、何やら急に清岡の事が恋しくなつて、君江は歩きながら突と摺寄つて人通りをもちまわらずその手を握つた。清岡は君江が石にでも躓いて、そのために急に自分の手を握つたとでも思つたらしく、「どうしたんだ。」と言いながら、往来の人目を憚つて溝際の方へ少し身を避けた。

「わたし、今日どうしても休みたいの。電話で断るわ。いいでしょう。」  
「断つてどうするんだ。」

「あなたの御用がすむまで、わたしどこかで待つているわ。」

「夜になれば会えるんだから、休むにも及ばないじゃないか。」

「だって、わたし何だか急になまけなくなつちまつたのよ。でも、あなたの御用の邪魔をしちゃアわるいわねえ。」

清岡はもともと用事があるのではない。君江の様子を窺いに不意と出て来たので、この場合振切つて別れたなら、浮気な君江の事だから、今夜自分の行くまでに何をしだすか知れないと、つまらない事が妙に気になり出した。

君江の方ではこの年月いろいろな男をあやなした経験で、こういう場合には男がすこしは持て余すほど我儘を言った方がかえつて結果の好い事を知っている。それにまた先刻占いはなしから清岡の言った事が何となく気にかかつてならぬ矢先、夜になるのを待たず一刻も早く男の心の打解けるような方法を取らなくてはならないと考えたのである。これも度々の実験で、君江は男がどんなに怒っていても結局その場に至れば訳もなく悩殺する事ができるものと、あくまで自分の魔力に信頼して安

心している所がある。魔力というのは、生れつき君江の肌には一種の温度と体臭とがあつて、別に技巧を弄せずとも一度これに触れた男は終生忘れることの出来ない快感を覚えるという事である。君江はこれまで一人ならず二人ならず、さまざまな男からお前はほんとの妖婦だなどと言われて、自分の肉体はそんなにまで男に強い刺撃を与えるものかと、次第に自覚した後熟練を積み、今では自分ながら深く信ずる所があるようになってゐる。

四谷駅の降り口近くまで歩いて来た時、君江は急に悲しいような遺瀨のないような表情を見せて、「じゃ、わたし、あんまり我儘をいうとわかるいから、ここから円タクで行きますわ。」

「うむ。」とそつ気なく言ったが、清岡は君江の遺瀨なげな様子に気がつくのと、その瞬間どうしたのか、昨日今日新に得た恋人と別れるような、何とも知れぬ残り惜しい心持になった。君江はわざとぼんやり清岡の顔を見詰めたまま、日傘の尖で砂利を突きながら立ちすくんでいる。

清岡は何も彼も忘れて寄り添い、「いいよ。休んでしまえ。どこでもいい。一緒に行こう。」

「あなた。ほんとウ。」と君江は巧に睫毛の長い眼の中をうるませて徐に俯向いた。

「#5字下げ」五「#「五」は中見出し」

府下世田ヶ谷町松陰神社の鳥居前で道路が丁字形に分れている。分れた路を一、二町ほど行くと、茶島を前にして勝園寺という「#「」<

編のつくり」の「戸」に代えて「戸の旧字」、第4水準2-3-48」額をか  
 かけた朱塗の門が立っている。路はその辺から阪になり、遙に豪徳寺裏  
 手の杉林と竹藪とを田と畠との彼方に見渡す眺望。世田ヶ谷の町中でも  
 まずこの辺が昔のままの郊外らしく思われる最幽静な処であるう。寺の  
 門前には茶畠を隔てて西洋風の住宅がセメントの門墻をつらねているが、  
 阪を下ると茅葺屋根の農家が四、五軒、いずれも同じような藪垣を結い  
 めぐらしている間に、場所柄からこれは植木屋かとも思われて、摺鉢を  
 伏せた栗の門柱に引違いの戸を建て、新樹の茂りに家の屋根も外からは  
 見えない奥深い一構がある。清岡寓と門の柱に表札が打付けてあるが、  
 それも雨に汚れて明には読み得ない。小説家清岡進の老父熙の隠宅であ  
 る。

初夏の日かげは真直に門内なる栗や棟の梢に照渡っているので、垣外  
 の路に横たわる若葉の影もまだ短く縮んでいて、「#「奚+佳」、第  
 3水準1-93-66」の声のみ勇ましくあちこちに聞える真昼時。じみな焦  
 茶の日傘をつぼめて、年の頃は三十近い奥様らしい品のいい婦人が門の  
 戸を明けて内に這入った。髪は無造作に首筋へ落ちかかるように結び、  
 井の字紺の金紗の袷に、黒一ツ紋の夏羽織。白い肩掛を引掛けた丈のす  
 らりとした瘦立の姿は、頸の長い目鼻立の鮮な色白の細面と相俟って、  
 いかにも淋し気に沈着いた様子である。携えていた風呂敷包を持替えて、  
 門の戸をしめると、日の照りつけた路端とはちがつて、静な夏樹の蔭か  
 ら流れて来る微風に、婦人は吹き乱されるおくれ毛を撫でながら、暫し  
 あたりを見廻した。

麦門冬に縁を取った門内の小径を中にして片側には梅、栗、柿、棗な  
 どの果樹が鬱然と生茂り、片側には孟宗竹が林をなしている間から、そ  
 の筍が勢よく伸びて真青な若竹になりかけ、古い竹の枝からは細い葉が

ひらひら絶間なく飛び散っている。栗の木には強い匂の花が咲き、柿の若葉は楓にも優って今が丁度新緑の最も軟かな色を示した時である。樹々の梢から漏れ落ちる日の光が厚い苔の上にきらきらと揺れ動くにつれて、静な風の声は近いところに水の流でもあるような響を伝え、何やら知らぬ小禽の囀りは秋晴の旦に聞く鴟よりも一層勢が好い。

婦人は小禽の声に小砂利を踏む跫音にも自然と気をつけ、小径に従って斜に竹林を廻り、此方からは見通されぬ処に立っている古びた平家の玄関前に佇立んだ。玄関には磨硝子の格子戸が引いてあるが、これは後から取付けたものらしく、家はさながら古寺の庫裏かと思われるほどいかに堅牢に見える。しかしその太い柱と土台には根継をした痕があつて、屋根の瓦は苔で青く染められている。玄関側の高い窓が明放しになっていたが、寂とした家の内からは何の物音も聞えない。窓の下から黄楊とドウダンとを植交えた生垣が立っていて、庭の方を遮っているが、さし込む日の光に芍薬の花の紅白入り乱れて咲き揃ったのが一際引立って見えながら、ここもまた寂としていて、花鋏の音も箒の音もしない。唯勝手口につづく軒先の葡萄棚に、今がその花の咲く頃と見えて、蛇の群れあつまつて唸る声が独り夏の日の永いことを知らせているばかりである。

「御免下さい。」と肩掛を取りながら、静に格子戸を明けると寂とした奥の間から、「どなたじゃ。」という声がして、すぐさま襖を明けたのは、真白な眉毛の上まで老眼鏡を釣し上げた主人の照であった。

「鶴子か。さアお上んなさい。今日は婆やお墓参り。伝助も東京へ使にやつて誰もおらん。」

「それじゃ、丁度よう御在ました。代りに何か御用をいたしましょう。」と婦人は包を持ったまま、老人の後について縁側づたいに敷居際に坐り、

「もう虫干をなさいますの。」

「いつという事はない。手がないから気の向いた時、年中やるよ。年寄の運動には一番いい。」

縁側の半ほどから奥の八畳の間に書帙や書画帖などが曝してある。障子も襖も明け放してあるので、揚羽の蝶が座敷の中に飛込んで来て、やがてまた庭の方へ飛んで行く。鶴子は風呂敷包を膝の上にほどいて、

「先日のお召物を仕立直してまいりました。あちらへ置いてまいりましょう。ついでにお茶でも入れてまいりましょうか。」

「そう。一杯貰いましょう。茶の間に到来物の羊羹か何かあったと思うが、ついでにちよつと見て下さい。」と老人は鶴子が座を立つのを見て縁側に曝した古書を一冊一冊片づけはじめた。五分刈の頭髪は太い眉毛や口髭と共に雪のように白くなっているので、血色のいい顔色はなお更報らみ、痩せた小づくりの身体は年と共にますます豊饒として見える。やがて鶴子が番茶と菓子とを持って来たのを見て、老人はそのまま縁先に腰をかけ、

「暫く見えんから風邪でも引いたのかと思っていた。市中では今だにインフルエンザがはやるそうだな。」

「お父さまは去年からお風邪一つお引きになりませんのね。」  
「今の若い者とは少し訓練がちがうからな。はははは。その代りふだん丈夫なものはころりと行くからな。当てにはならん。」

「アラ、そんな事をおっしゃるもんじゃありません。」  
「むかしから頼みにならない事を、君寵頼み難し。老健頼み難しなどというじゃないか。はははは。進は相変わらず達者か。」

「はい。おかげさまで。」

「その中ちよつと逢いたいと思う事があるのだ。実はこの間偶然電車の

中でお宅の御兄さんにお目にかかつてな……。」「と老人は言いかけて咳せ嗽せきをしながら眼鏡越しに鶴子の顔を見た。鶴子はかえってさり気なく、

「何か、わたくしの話が出ましたの。」

「そうだ。わるい話ではない。お前の戸籍をこの後ごどうして置くかというはなしさ。なりはじめの事はもうとやかく言つた処で仕様のない事だからな。成事せいじは説とかず、遂事すいじは諫いさめず、既往きおうは咎とがめずという教おしえもあるから、わしはいずれにしても異存はないと申上げて置いた。お前の家とわしとが承知なら、進は無論何とも言うはずはないわけだから、どうだね。早くその手続をしてしまったら、届書は区役所の代書にたのめばすぐ出来るから、印さえ押せばそれでいいのだよ。」

「はい。帰りましたら早速そう申します。」

「戸籍などはどうでもいいようなものだが、しかし人倫じんりんの道は正しいに越した事はない。幾年も夫婦同様にしていれば結局籍を入れるのがあたり前のはなしだからな。最初の事は能よく知らんが、お宅のはなしではもう五年になるそうだな。」

「はい。たしか。」と鶴子はわざと言葉を濁にごして伏目になった。今更指を折つて数えて見るまでもなく、鶴子は五年前、年齢は二十三の秋、前の夫が陸軍大学を出て西洋へ留学中、軽井沢かるいざわのホテルで清岡進と道ならぬ恋に陥つたのである。先夫の家は子爵ししやくで、別に資産はなかったが、とにかく旧華族の家柄なので、世間の耳目を憚はばり親族は夫の帰朝を待たず多病といいなして鶴子を離別した。鶴子の家にはその時既に両親がなく、惣領そうりょうの兄が実業界では相応に名を知られていたところから、衣食に窮しないだけの資産を鶴子に与えて生涯実家や親類の家へ出入する事を禁じた。その時分進はまだ駒込千駄木町こまいめせんだぎちよ町にあった老父熙おきの家において、文学好きの青年らと同人雑誌を刊行していたのであるが、鶴子が離別されると

間もなく父の家を去つて鎌倉に新家庭をつくつた。半年ほどたった時老父の熙は突然流行感冒で老妻を先立たせ、また文官年限令で帝国大学教授の職を免ぜられたので、これを機会に千駄木の家を人に貸して、以前から別荘にしてあつた世田ヶ谷の廃屋に棲遅した。

世田ヶ谷の家には十年ほど前まで、八十歳で世を去つた熙の父玄斎が隠居していた。玄斎は維新前駒場にあつた徳川幕府の薬園に務めていた本草の学者で、著述もあり、専門家の間には名を知られていたので、維新後しばしば出仕を勧められたが節義を守つてこの村荘に余生を送つた。今日庭内に繁茂している草木は皆玄斎が遺愛の形見である。

熙は初め中村敬宇の同人社に入り後に佐藤牧山と信夫恕軒との二家について学を修め、帝国大学を卒業後は直に助教授に挙げられ、老免せられるまで凡三十年漢文の講座を担任していたのであるが、深く時勢に感ずる所があつたと見えて、平素学生に向つては、今の世の中に漢文学の如き死文字を学ぶほど愚な事はない。唯骨董としてこれを好むものが弄んでいればよいものだと呼して、人に意見をきかれても笑つて答えず、同僚の教授連とも深くは交らず、唯自家の好む所に従つて専ら老荘の学を研究し、著書も少くはないのであるが、一として世に示したものはない。熙はその子の進が人妻と密通して世間を憚らず一家を構えたのを知つて、深く憤りはしたものの、現代の青年男女は老人の訓戒などに耳を借すはずがないと、あきらめ切つていたので、表向は何事も知らぬ振りで、実は義絶したのも同様、世田ヶ谷に隠居してから三年ばかりの間は一度も音信をしたことさえなかつた。進の方でも父が平生の気質からその憤りを察して、これに反抗するため、わざとそれなりに月日を過していた。ところが老人は亡妻の命日に駒込の吉祥寺に往つた時、一人の若い女が墓前に花を手向けているのを見て、不審のあまり、丁度狭い垣根の内の



ことで、女の方から気まりわるそうに辞儀をするまま、その名をきいて始めてその女が倅せがれの妻の鶴子である事を知ったのである。老人は進の如き乖戾かいらいな男と好んで苦楽を偕ともにしているような女が、言わばその姑しゅうめに当るものの忌日きにちを知って墓参りをすると、そもそもどうした訳わけであろう。そんな訳のあらうはずがない。年寄の耳の聞まちがえではないかという気もしたので、墓地の小径こみちを並んで歩む折重ねてその名をきき直した。それが話の糸口になって、寺の門を出てから電車に乗って別れる時まで知らず知らず話をしつづけた。老人は平素現代の青年男女には道德の觀念めいんは微塵みじんもない。男は大抵乖戾放慢の徒で、女はまず禽獸きんじゅうと大差なきものと思込んでいる矢先、鶴子の言葉使いや拳動のしとやかな事がますます不可思議に思われ、更にまた、これほど礼節をもわきまえている女がどうして姦通かんつうの罪を犯したのであるかと、家へ帰った後も頻しきりに心を勞した末、ふと老人は鶴子が操みさおを破ったのはあるいは放蕩無頼ほうとうむらいな倅せがれに欺あざむかれたためではないかという気がした。果してそうだとすると、実に気の毒な事だ。何となく親の身として申訳のないような心持がして来るので、その後老人は図はからず新宿の停車場ていしゃばで出会った時は此方こなたから呼びかけたくらいであった。それらの事から、鶴子はいつともなく世田ヶ谷の隠宅へ出入することを許されるようになったのであるが、しかし進との間柄について、二人とも何やら互たがいに遠慮して、問いもせず言いもせず、そのままになっている。生計の事ではその後進こは莫大ばくだいな収入がある身となっているし、老人の質素な生活は恩給だけでも有り余るほどなので、互に家事向の話の出いすべき所がないわけであった。

世田ヶ谷の家には庭掃除げなんの下男げなんと雇婆やとこいばばがいるものの、鶴子は老人が日々の食事を始め衣類や身のまわりの事に不自由しているらしいのを見て、それとなく陰へ廻って気のつくかぎり世話をするようになった。表向き

お世話をするとはいえ老人はきつとそれには及ばないと言うにちがいはない。かつまた、清岡の家には既に或医学博士に嫁した姉嬢もあるので、鶴子はその手前をも憚つて、何事も目に立たないようにひかえ目にしてゐる。その態度や心持は月日と共にのおのずから老人の眼にもわかるようになったので、老人はいよいよ鶴子の胸中を気の毒に思い、心竊に倅進の如きものの妻にはむしろ過ぎたものと感服しなければならぬようになった。

老人は茶を飲み干した茶碗を膝の上に握りながら、「その中お宅へ伺つてお話を伺おうと思つてはいるのだがね、年をとると、つい袴をはくのが面倒でな。そうかといつて、初めて伺うのに着流ではあまり失礼だし、何か好い折がと思つてはいるのだが、お前はその後やはり出入りはせんのかね。」

「はい。そのままになつております。兄ばかりならかえつて遠慮が御在りませんが、義姉の手前も御在りますから。」

「それは大きにそうかも知れない。」

「とにかくわたくしが悪いのにちがいは御在りませんのですから、別にどなたの事もお怨み申してはおりません。」

「その心持があればもう立派なものだ。」と言つた時、「#「日+麗」、第4水準2-14-21」した古法帖の上に大きな馬蠅が飛んで来たので、老人は立つて追いながら、「過を改むるに憚ること勿れ。若い時の事はどうもいたし方がない。人間の善悪はむしろ晩節にあるのだよ。」

鶴子は何か言おうとしたが、自分ながら声が顛えはせぬかと思つてそのまま俯向くと、胸が急に一杯になつて来て、どうやら眼が潤んで来るような心持がした。折好く勝手の方に人の声がしたのを聞付けて、これ幸とあわてて坐を立つた。老人は馬蠅の飛び去る方を睨みながら、「酒

「屋か郵便屋だろう。うっちゃってお置きなさい。」と徐に石摺の古法帖を疊んだ。

鶴子は涙を見せまいと台所へ行つて見ると、老人の言つた通り、酒屋の男が醤油の壇を置いて立去るところであつた。勝手口は葡萄棚のおかげになつて日の光も和げられ、竹藪の間から流れて来る風はひやりとするほど爽かである。女中部屋は雇婆が出がけに掃除をして行つたものと見え、火鉢の灰もならしたまま綺麗に片づいている。鶴子は酒屋の男の去つた後あたりにはもう誰もいないと思うと、こらえていた涙が一時に溢れ落るのを急いでハンカチで押えた。ここの家のお父さまは何も知らずにいらつしやるのであるが、自分と進との間柄は今では名ばかりの夫婦で、入籍するの、しないのというような状態ではない。夫の進は一昨日家を出たなり今夜も多分帰つて来ないであろう。この二、三年原稿の製作を口実にして随意に外泊することはもう珍しくはない。いずれ二、三日すれば帰つて来るであろうが、今のような状況では、自分を正妻にして籍を入れる事をまさかに拒みはしまいけれど、さして喜びもしない事は言わずと明である。事によればかえつて迷惑そうな顔をしないと限らない。と思うと、鶴子は老人の好意をかたじけなく思うにつけ、その好意を受ける事のできない身の上を省みて涙を催さずにはいられなかつたのである。

進と鶴子との恋愛生活は鎌倉に家を借りていた間、わずか一年くらいのものであつた。進は一躍して文壇の流行児になり、俄に売文の富を得るようになる、忽ち杉原玲子という活動写真の女優に家を持たせるばかりか、絶えず芸者遊びをするようになった。その後玲子が進を捨てて同業の俳優と正式に結婚をすると、進はすぐその代りにカツプエーの女給を妾にするという有様。鶴子は殆どあきれ返つて、嫉妬の情を起すよ

りも次第に夫の人格に対して底知れぬ絶望の悲しみを抱くようになった。鶴子は女学校に通っていた時から、仏蘭西フランスの老婦人に就いて語学と礼法の個人教授を受け、また国学者某氏に就いて書法と古典の文学を学んだ事もあったので、結局それらの修養と趣味とがかえって禍わざわいをなし、没趣味な軍人の家庭にはいたたまれなかった。それと共に自分から夫に拵えらんだ文学者清岡進の人物に対しても永く敬愛の情を捧げている事ができなくなつたのである。初め軽井沢の教会堂で人から紹介せられた時の進と、今は通俗小説の大家を以て目もくせられている進とを比較すると、全く別の人としか思われぬ。五年前の進は勉学の志を擲なげうたない真率しんそつな無名の文学者であつたが、今日こんにちの進は何と云つてよいのやら。思想上の煩悶はんもんなどは少しもないらしい様子で、その代り絶えず神経を鋭くして世間の流行に目を着け、營利にのみ汲きつ々としているところは先相場師ますずと興行師とを兼業したとでも言つたらよいかも知れない。新聞に連載しているその小説を見れば、今まで世にありふれた講談や伝奇を現代の口語に書替へたまでの事で、忌憚きたんなく言えば少し読書好きの女の目にさえ、これでは殆ほとんど読むには堪えまいと思われぬくらいのものである。鶴子は進が去年の暮あたりから或婦人雑誌あるに連載し出した小説を見た時、ふと六樹園ろくじゆえんの『飛弾匠物語』のたくみものがたりの事を思出して、娘の時分源氏の講義を聞きに行つた国学者の先生が、いつも口癖のように今の文士にくらべると江戸時代の作者がどれだけ優すぐれているか知れないと言つたことなどを夢のように思返した事もあった。平生家へ出入する進の友人を見れば、言葉使いから様子合あいまで、いずれも兄弟かと思われぬほど能く似た人ばかりで、二、三人集まればすぐ洋酒を飲み、胡坐あぐらをかいたり寐ねそべつたりして、喧嘩けんかでもするよな高調子。その談話は何かと聞けば、競馬の掛けごとに麻雀賭博ぼく、友人の悪評、出版屋の盛衰と原稿料の多寡たか、その他は女に関する卑

猥極る話で持切っている。

鶴子は既に幾たびとなく決心して、折があつたら進の家を去ろうと思つていた。今更兄の家の厄介にはなれないので、その当時義絶の証として与えられた金がまだ半分位は銀行に預けてあるのをたよりに、間借りでもして、何処かの事務員にでも雇われようとして、すっかり覚悟をきめて、それとなく最後の破綻の来る時を待っていたが、進の方からはまさか手切金の請求を恐れたわけでもあるまいが、そのままに何事も言出さず、表向きはどこまでも令夫人らしく冷に崇め奉っているので、月日のたつにつれて、さすがに女の方から突然別ればなしを持ち出す訳にも行かず、つい言出しそびれて今日に至った。それやこれやの思いに暮れて、鶴子はハンケチを口に銜えたまま台所の柱に身をよせかけ、葡萄棚に集る虻の羽音を聞いていた。

突然人の蹙音がしたので、鶴子はびっくりして様子をつくろうとしたが、眼の縁に残った涙の痕と、憂いに沈んだ顔の色とは俄にどうする事もできない。

老人は鶴子が勝手へ行つたままいつまでも戻つて来ないので、性の好くない行商人でも来たのではないかと、何気なく様子を窺いに来たのである。

「鶴子。心持でもわるいのじゃないか。何なら少しお休みなさい。」

「いいえ。別に。」と言いはしたものの、鶴子は身体の置場にこまっ板の間にべつたり坐った。

「顔色がよくない。」と老人は既に様子を察したもので、わしは人から聞いたはなしは何事によらず他言はしない。むかし細井平洲という先生は人の手紙を見るとその場で焼いてしまったという事だ。心配せん方がよい。」

鶴子はこの時胸にある事は何も彼もこの老人だけには打明けてしまいたい気になって、すが継るようにその足下に摺すり寄り、「お話したい事が御ご在ますの。わたくし、お父さまより外ほかには、お話したいと思ひましても、誰もお話する方が御在ませんから。」

「うむ。聞きます。先刻さつきからどうも様子が変だと思つていた。」と老人は酒屋の男が明放あけはなしにして行つた勝手口の硝子戸ガラスドに心づき、手を伸のしてそれを閉めた。

「お父さま。あのおはなし。あれはもう、折角おぼしめの思召して御在ますけれど、実はもう、なんにもならない事だと存じますから。」と涙を噉すすつた。

「そうか。家がうまく行つておらんのか。困つたものだ。お前かんがえの考はどうだ。この末望みがないのか。」

「今のところ、別にどうという事も御在ませんけれど、籍を入れましても、ほんの名義だけの事で、いつどういう事になるか分かりませんから、かえつてこのままの方がよくはないか知らと、そういうような心持もいたします。わたくし、ほんとに我儘わがままな事ばかり申しまして……。」

「いや、それで事情は大抵わかりました。お前に向つて進の事を悪くいつては甚気はなはだの毒だが、これは進ばかりには限らん事で、今日文学を弄そぶ青年に物の道理を説いてきかしてもわかるはずはない。わしは長年教師をしてきたからそのくらいの事はよく知つています。見込みのあるものなら、呼びつけて意見もして見るが、わしはまず駄目だとあきらめて……。」

「わたくしが、何か申上げたようになりましても困りますし……。」

「それは今も言う通り、わしは一切何も言いません。しかしこのままにして置いたら、行末お前が困るでしょう。それが気の毒だ。」

「いえ。わたくしは、もうどの道、若い身空でも御在ませんから、行先

の事は別にそれほど心配してはおりません。長い間には宅の心持もまたどんな事で直らないとも限りませんし……。」

「うむ。うむ。」と老人は立ったまま腕を拱こまねいて嘆声を発したが、裏木戸の方に音のするのを聞きつけ、「伝助が帰って来たらしい。あつちで話をしましょう。」

老人は手を取らぬばかりに鶴子を急せき立てて勝手から立ち去った。

「#5字下げ」六「#「六」は中見出し」

雨は降っているが、小降りで風もなく、雲切れのし始めた入梅の空は、まだなかなか暮れきらぬ七時頃。富士見町ふじみちようの待合野田家まちあいのだやの門口へ自動車を乗りつけた三人連づれ。一人は清岡の原稿売込方を引受けている駒田弘吉という額の禿はげ上った鰻口わにぐちの五十男に、一人は四十あまり、一人は三十前後の、一見していずれも新聞記者らしい眼鏡をかけた洋服の男である。駒田が先に格子戸こっしどを明け、靴をぬぐ間から女中にかからいながら、どやどやと表二階の広い座敷へ通る。前以て電話が掛けてあったものと見えて、煙草盆たばこぼんに座布団ざぶとんも人の数だけ敷いてあって、煉香ねいこうの匂においがしている。「お風呂ふろがわいております。」と女中の挨拶あいさつに、間もなくこの土地では姉さん株らしい三十近い年増としまと、二十前後はたちの芸者が現われ、女中の運び上げる料理の皿つくえを卓の上に並べる。

駒田は現在『丸円新聞』に連載せられている清岡の小説がほどなく半月くらいで完結する見込なので、早くも別の新聞社へ交渉して次の原稿を売込む相談をまとめたところから、編輯長へんしんちゆうへは内々で割戻わりもどしの礼金も

渡してしまい、部下の記者は待合に連れて来て酒肴を振舞い芸者をあてがう腹である。

「先生も、もうそろそろお出ででしょう。構いませんから先へやりましょう。」と駒田は盃を年上の記者にさして吸物椀の蓋をとる。

「僕はどうも飲む方は得意でない。」と年上の記者は芸者に酌をさせながら、「まず箱なしの一方というやつだ。」

「恐入りましたね。売ッ児はそれでなくっちゃいけません。」

「お前、どこかで見たことがあるな。思出せないが。まさかカツフェーでもあるまい。」

「いいえ。そうかも知れませんか。この頃は芸者が女給さんになったり、女給さんが芸者になったり、全く区別がつきませんからね。」

「芸者から女給になるのはざらだが、カツフェーから芸者になるのは少いだろう。」

「少いこともないわ。随分あつてよ。ねえ。姐さん。」

「そうか。随分いるのか。それは驚いた。」

「そうねえ。五、六人……さがしたらもつといるかも知れないことよ。」

「銀座あたりにいた奴はいないか。」

「辰巳家からこの間お弘めした児、なんていったつけ……。」「と年増が飲みかけた盃の手を留めて、眉を寄せ、「あの児はたしか銀座にいたんだわね。」

「新橋会館よ。」と若い方の芸者が直に答えた。

「新橋会館に。そうか。いつ時分だろう。」と今まで黙っていた若い記者が急に卓を押し出したので、駒田は女中を見返り、

「その芸者を掛ける。おい。名前は何ていうんだ。」

「辰巳家の辰千代さん。」と若い芸者が名ざしをしたので、女中はすぐ



さま立ちかけた時、下から、「お花さん。お客様がお見えになりました。」

「先生だろう。」と駒田は襖の方を見返りながら、少し席を譲る間もなく、梯子段に躑音がして、パナマ帽を片手に、鼠セルの二重廻を着たまま上つて来たのは、清岡進である。

「おそくなつて失礼しました。」と進は年増の芸者に帽子と二重廻を渡し、お召の一重物に重ねた鉄無地一重羽織の紐を結直しながら、卓の上に小皿と箸の置いてある空席に坐る。年輩の記者は既に知り合っている見え、若い記者を紹介したので、直様茶ぶ台の上で名刺の交換が始まった。女中が芸者の返事と共に銚子を持って来て、

「辰千代さん。すぐ伺います。」

「ほんとに皆さん、あがらないのね。」と年増が新しい銚子を受取つて、「あなた。お一ツ。」

「一向景気がつかないようだね。」と清岡は酌をさせながら、駒田を顧み、「まだ後から来るのか。」

「目下大に選定中なんですよ。まだ外に知らないか。女給芸者がいるから、ダンサー上りや女優上りもいるだろう。どうせ、呼ぶなら変わった方がいい。」

「こちら、ほんとに物好きねえ。」

「家にもこのあいだまで一人変わったのがいたんだけど、誰がいいか知ら。」

「姐さん、ほら。桐花家さんの。評判じゃないこと。」

「ウム。京葉さん。」と年増は膝を叩いて、「あの人ならむしろダンサー以上。逆立くらいやり兼ねないわ。」

「その代り大変な御面相だろう。」

「ところが綺麗で、色っぽいのよ。何しろこの土地で一番いそがしい人ですもの。」

「いやに宣伝するなア。いくらか貰っているな。とにかく呼べ呼べ。」と駒田はすこし酔い始めたらしく大分元気づいて来たが、清岡は桐花家が、この場合よせとも言えないので、素知らぬ顔をしていると、年増の芸者は座談に興を添えるつもりで、

「わたしだって、もう三、四ツ年がわかれば芸者なんぞやめて銀座へ押出しますわ。女給さんの方がとにかく表面だけは素人なんですからね。何をするにも胡麻化しがききますよ。わたし、つくづくそう思っているのよ。わたしの家のすぐ隣が待合さんなのよ。その家へいろいろなお客さまを連れて来る女給さんがあるのよ。家が建込んでいるから、窓から首を出せば障子一重で、話はみんな聞えてしまうのよ。身丈がすらりとして、身なりは芸者衆よりいい位だから、銀座でもきつと一流のカツフェーでしようよ。いつでも来るのは朝早いよ。九時前の時もあるわ。それから正午になるかならない中お立ちだわ。こっちは九時や十時じゃやっとなと眼がさめた時分でしょう。それに今のところ抱はいないし家の内はしんとしているから、つい耳をすまして聞く気になるのよ。」

清岡はだまって若い方の芸者に酌をさせている。記者は二人ともいかにも面白そうに、「うむ、それから、それから。」とあおり立てるので、年増も興にまかせて、

「相手のお客様は時々ちがうらしいのよ。だけれど、いつでも君さん君さんというから、きつと君子さんとか君代さんとかいうんでしようよ。実にすごいものよ。いつだったか感心しちまった事があるわ。」

清岡は上目づかいにじろりと記者の顔を見た。駒田も年を取っている

だけ、すぐに気がつき、芸者のはなしがドンフワンの君江の事でなければいいかと心配したらしく、それとなく記者の方を見たが、記者は二人とも案外銀座のカツフェーの事には明あかるくないと見え、別に心当りもない様子で、「感心したというのは一体どういう事なんだ。芸者よりも濃厚だっというのか。」

「それア勿論もちろんそうよ。まアお聞きなさいよ。虚言うそ見たようなはなしだけれど……。」

駒田はとにかく長く話をさして置いてはいけなないと、気転をきかして、「おい。さつき呼んだ芸者はどうした。催促するようにそう言って来い。」

「はい。」と立上ったのは若い方の芸者なので、駒田は更に、「おれはそろそろ飯をくおう。」

「僕もつき合いましたよ。」と酒を飲まない記者が駒田に同意した。御飯の給仕やら番茶の入替いれかえやらで、どうやら年増芸者のはなしも中絶した時、辰千代という女が明けてある襖ふすまの外に手をついた。

年は二十はたちばかり。つぶしの島田に掛けたすが糸も長目に切り、薄紫うすむらさきに飛模様の裾すそを長々と引いているので、肉付のいい大柄な身は芸者というよりも娼妓しょうぎらしく見られた。

「銀座にいたのはお前か。」  
 「ええ。そうよ。」と辰千代はむしろ得意らしい調子で、「あつちで目に掛かったか知ら。何しろわたし眼がわるいんでしよう。だから失礼ばっかりしているのよ。」

年増の芸者は辰千代が自分の方には見向きもせず独りでぺらぺらしゃべり続けるのを、さも苦々にがにがしそうに尻目に見返したが、此方こなたは一向気がつかない様子で、さされる盃を立てつづけに二杯干して若い記者に返し

ながら、「こつちへ来てから一度も銀座の方へ行かないから、きつと変わったでしょうね。今どこが一番賑なのか知ら。」

「お前、先に何処にいたんだ。コロンピヤか。」

「あら、失礼しちゃうわ。新橋会館よ。」

「どうして芸者になったんだ。あんまり発展しすぎて睨まれたんだろう。」

「そう仰有るけれどカツフェーは割に堅いことよ。何しろ昼間から夜の十二時までにはちゃんとお店にいるんですもの。」

「十二時から先のはなしさ。」

「十二時から先は誰だつて寝るんじゃないの。夜通し起きてはいられないじゃないの。ねえ。あなた。」

その時同じく潰島田に結った小づくりの年は二十二、三の芸者につづいて、ハイカラに結った身丈の高い十八、九の芸者が来て末座に坐る。

清岡は小づくりの女が京葉だということは、いつぞや市ヶ谷八幡の境内から窃に君江の跡をつけた晩、一生涯忘れるはずのないほどはつきり見覚えている。しかし相手には自分の顔を見知られない方が何かの場合都合がいいと思つて、その後二、三度この土地へあそびに来た時も用心して違わないようにしていたので、自然横を向いて煙草の烟ばかり吹いていると、駒田は飯をすませて廊下へと立つ。

「駒田さん。ちよいと。」と女中が裏梯子の方へ引張つて行つて、「お北姐さん。丁度二本になりますから、もう帰してもよろしいでしょう。」

「後の奴はみんな間に合うのか。」と駒田は時計を見た。

「菊代さんだけ少し高いんですけれど。」

「そんならそれも帰してしまえ。どの道、おれはいらないんだから、三人残して置けばいい。」

「じゃア、京葉さんに、辰千代さんに、松葉さん。」と念を押して、「  
どういふ風にしましょう。」

女中が相方をきめるのに困っているらしいのを見て、駒田は厠から帳  
場へ姿をかくし、それから清岡を呼出し、座敷には招待した記者二人を  
残して好きな芸者を扱取り取らせる事にした。

「そう致しましょう。」と女中はまず年増芸者を帰すように座敷へ行っ  
て見ると、若い記者は女給上りの辰千代を膝の上に載せて窓に腰をかけ  
外を見ながら、流行唄を唄っているので、これはそのままにして、年上  
の記者に耳打をした。清岡は様子を察して何とつかず立って厠へ行き、  
駒田をさがす振りで裏梯子から下へ降りて、再び二階の座敷へ戻って見  
ると、記者の姿は二人とも見え、女中が脱いである洋服の上着と折革  
包とを持ち、立ちかけた京葉に、「三階のすぐ突当り。」と教えている  
ところであった。清岡は何事も気のつかない振りをして、窓の敷居に腰  
をかけると、一人取残された身丈の高いハイカラの芸者は、その場の様  
子から清岡を自分の出る客と思つたらしく、「もう舞れたようね。」と  
言いながら並んで腰をかけた。

雨はいつか歇んで、両側とも待合つづきの一本道には往来する足駄の  
音もやや繁くなり、遠い曲角の方でバイオリンを弾く門附の流行唄が聞  
え出した。

「今帰つたお北の家はどこだ。富士見町の方が。」と、清岡は何の訳も  
ないような風できいて見た。実は先刻その女のはなしをした隣りの待合  
の事が気になつていたのである。

「いいえ、三番町もずっと先の方……。」

「それじゃ、女学校か何かある、あっちの方が。」

「ええ。そうよ。わたしの家もお北姐さんの家のすぐそばだわ。」

「そうか。お北の家の隣りは待合だっというじゃないか。」

「ええ。千代田家さんでしょう。先どなりがお北ねえさんの家で、手前の方がわたしのいる家なのよ。」

「そうか。それじゃその家にちがいない。背中合せせなかあわになっている待合がありやアしないか。」

「何だか変ねえ。」

「義理があるから、今度行こうと思っっているんだけど、様子がわからないからさ。」

「あの辺へんでお茶屋さんは千代田家さんだけだわ。何しろ許可地の一番はずれですもの。」

女中が三階から降りて来て、「どうぞ。」と言ったが、清岡はあまりぞつとしない芸者なので、

「ちよつと用があるんだが、駒田はどうした。まだ帰りやアしまい。」

「先ほどお帳場で旦那とお話していらっしやいました。見て参りましよう。」

女中が立ちかけた時、駒田は上着のかくしへ大きな紙入を差込みながら、表梯子を上つて来た。駒田は商売の取引ならば待合でもカツフェーでも何処へでも出入りするが、自分では滅多に女など買ったことのない男で、新聞社の営業部に勤めていた頃から株相場や家屋地所の売買に手を出し、今では大分身代しんたいをつくり上げたという噂うわさであるが、それにもかかわらず、電車の出来ないむかしから、今以て四谷寺町辺よつやてらまちへんの車さえ這入はいらぬ細い横町の小家に住んでいる。清岡は駒田の事を爪つまに火をともし流儀の古風な守銭奴しゅせんぬだと思っっている。

「駒田君。帰るなら一緒に出よう。まだ時間は早いし、どうせ電車だろう。」

「君はこれから銀座へ廻るのかね。」

「イヤ、彼奴はもう止めだ。君も知っているような始末で、ああ見さか  
いなしに誰でも御座れじゃ、全く名譽毀損だからな。すこし相談したい  
事があるんだ。とにかくぶらぶら出かけよう。」

「アラ、ほんとにお帰りなの。」と芸者はさも驚いたような顔をしたが、  
清岡は見向きもせず、丁度窓際の柱に呼鈴の紐がついていたのを引寄せ  
て、ボタンを押した。

駒田は清岡と共に表梯子を降りながら、急に思出したらしく、送り出  
す女中を顧みて、「おいおい。お泊りのようだったら芸者は明日の朝時間  
通りに帰してしまえ。」

「それはもう承知しております。」

「別に忘れ物はなかったな。マッチを貰って行こう。」と駒田は靴をは  
きながらも、さすがに抜目が無い。

「またどうぞ。お近い中に。」という声を後に二人は格子戸をあけて外  
へ出ると、雨あがりの空には月が出ていて、色町の横町はいかにも夏の  
夜らしく、往来する女の浴衣が人の目を牽く。

「駒田君。これから、赤坂までつき合わないか。」

「この頃はあの方面ですか。」

「カツフェーももう飽きたからね。やつぱり芸者が一番いいな。少しピ  
ンとしたやつをどうかしようと思っっているんだがね。」

「どうかすると言うのは、身受でもしようというはなしですか。それは  
考物ですよ。」

「君に相談すれば、きっとそう言うだろうと思っっていたんだ。」

「まとまった金を出すことはとにかく止した方がいいですよ。芸者の身  
受も将来奥さんになれるとか何とかいう目当があれば、女の方もそのつ

もりで真面目になるでしょうが、そうでなければ、きつと面白くない事が起つて結局お止めになるんですからな。」

「将来は、僕の方だつてわからない。また一人になるかも知れないし……。」

「そうですか。風雲頗急ですな。」

「イヤ、まだそれほどのも事でもないんだがね。どういふもんだか、家へ帰ると陰気になつていけない。」

清岡は問われるままに、家の事情を委しく語りたいと思ひながら、さてどういふ風に、何からはなし出したらいいものかと考えながら歩いて行く中、忽ち富士見町の電車停留場に来てしまった。そもそも清岡には最初から鶴子を正妻に迎えるほどの堅い決心があつたわけではない。唯折々人目を忍んで逢瀬をたのしむくらいに留めて置くつもりであつたが、女の方が非常にまじめで、事件が案外重大になつてしまつたので、どうする訳にも行かず、幸女がその兄から金を貰つたのを聞いて鎌倉に家を借りて同棲したような次第であつた。勿論人の妻として才色両つながら非の打ちどころのない事は能く承知しているが、その後清岡は月日の立つにつれて自分の品行の修らないところから、何となく面伏な気がしだして、冗談一ツ言うにも気をつけねばならぬような心持がして窮屈でならなくなつた。それがため、一日に一度はどうしてもカツプエーか待合に行つて女給か芸者を相手に下らない事を言いながら酒を飲まなければ心淋しくてならないような習慣になつた。清岡は女給の君江が最少し乗気にさえなつてくれれば、明日といわず即座にカツプエーなり酒場なり開業させようと思ひながら、そういう相談には君江ではいかにも頼みにならないところから、いつそ方面を転じて、これぞと思う芸者の見つけ次第、芸者家でも出させて見ようかという気になつている。実はそれ



らの相談もして見たいと思つて、駒田を誘い出したのであるが、駒田は電車が近づくのを見ると、早くも折草包おりかはんを抱え直して、年寄りのくせに飛乗りでもしかねまじき様子。清岡は忍興たぢまちがさめて、

「それじゃ失礼。僕はちよつと寄るところがあるから。」

「あした。午後は丸円社にいますから、御用があつたら電話をかけて下さい。」と駒田は電車に乗った。

時計を見ると十時である。清岡はこのまま家へ帰れば、さしておそいというでもなく、丁度ほど好い時間だとは思ひながら、夜ふかしに馴なれた身は、何となく物足りない気がして、もう一軒どこへか立寄つてからでなくては、どうしても足が家の方へは向かない。しかし今時分、丁度酔客の込合こみあう時刻には、銀座のドンフワンなどへは君江との関係もあるところから、うかうか一人では行かれない。銀座辺の飲食店を徘徊はいかいする無頼漢や不良の文士などから脅迫される虞おそれもあり、また君江が酔客を相手に笑い興ずるのを目の前で見ているのも不愉快である。清岡はこれから立寄るべきところは、まずこの間から折々出かける赤阪あかさかの待合より外にはないと思ひながら、しかし目ざした芸者は既に五、六度呼んでいるにもかかわらず、今もつてなかなか承知する様子がないので、今夜あたりも大抵話はまとまるまいと思つと、行かない先から、何やらむやみに腹立しい心持になつて来る。しかしこの腹立しさもよくよく考えて見ると、あの芸者が自分の意に従わないという事から発しているのではなくて、その原因はやはり君江に対する平素の憤りから起つてゐる。君江がもし自分の思うようにさえなつていれば、何もあんな芸者にふられるよくな馬鹿な目に遇あわなくてもすむ事だと思つと、一時ゆるがせにしていた報復の悪念がまたしてもむらむらと胸中に湧わき立って来る。清岡が君江に対して、何よりも腹が立ってならないのは、平素君江が何の心配も

なく面白そうに日を送っている事で、その次には君江が名声籍々たる文  
学者の恋人である事をさほど嬉しいとも思っていないように見える事  
である。もし自分が関係を断つような事があっても女の方では別に名残惜  
しいとも何とも思わないように見える事である。君江は自分との関係が  
断えればかえってそれをよい事にして、直様代りの男を見付けて、今と  
同じように、たわいもなく浮々と日を送るに相違ない。虚栄と利慾の心  
に乏しく、唯懶惰淫恣な生活のみを欲している女ほど始末にわるいもの  
はない。こういう女を苦しめるには肉体に痛苦を与えるより外には仕様  
がないかも知れない。と行って、まさかに髪を切ったり、顔に疵をつけ  
たりする事もできなるとすれば、まず二、三カ月も床につくような重い  
病気に罹るのを待つより外に仕様がなわけである。そんな事を考えな  
がら足の向く方へとふらふら歩きながら、ふと心づいて行先を見ると、  
燈火の煌々と輝いている処は市ヶ谷停車場の入口である。斜に低い堀外  
の町が見え、またもや真暗に曇りかけた入梅の空に仁丹の広告の明滅す  
るのが目についた。

君江の家はあの広告のついたり消えたりしている横町だと思つと、一  
昨日から今夜へかけてまず三日ほど逢わないのみならず、先刻富士見町  
で芸者から聞いたはなしも思い出されるがまま、とにかくそつと様子を  
窺つて置くに若くはないと思定め、堀端を歩いて、いつもの横町をまがっ  
た。

角の酒屋と薬屋の店についている電燈が、通る人の顔も見分けられる  
ほど隈なく狭い横町を照している。清岡は去年から丁度一年ほど、四、  
五日目にはここを通るので、店のものにも必顔を見知られているにちが  
いないと、俄に眉深く帽子の鍔を引下げ、急いで通り過ると、その先の  
駄菓子屋と煙草屋の店もまだ戸をしめずにいたが、ここは電燈も薄暗く

店先には人もいない。路地の入口の肴屋さかなやはもう表の戸を閉めているので、ちよつと前後ぜんごを見廻し、暗い路地へ進入すすみいしようとすると、その途端にぱつたり行き会つたのは間貸しの家の老婆である。闇やみにまぎれて知らぬ振りで行き過ぎようとしたが、老婆は目ざとく、「アラ旦那。」と呼びかけ、「一歩ひとあしちがいで、まア能よう御在ございました。不用心ですから鍵かぎをかけて、お湯へ行こうと思つたんですよ。お君さんも今夜はお早いですか。」

「イヤちよつと市ヶ谷まで用事があつたから、寄つて見たんだよ。帰つて来るまで、とても待つてはられないから、今夜寄つたことは黙もつていておくれ。また心配するからなア。」

「じゃ、お茶一ツ上つていらつしやいまし。」

「でも、おばさん、お湯へ行くんだらう。」

「ナニ、あなた。まだ急がないでもよう御在ます。」

清岡は振切つて去るわけにも行かず、勧められるがまま老婆の寐起ねおきしている下座敷に通り長火鉢の前に坐すわつた。座敷は二階と同じく六疊ばかり。壁も天井も煤すすけて、床板ねだも抜けた処さえあるらしいが、隅々まで綺麗いに片づいていて、障子や襖紙ふすまがみの破れも残らず張つてあるなど、もし借手さえあればここも貸間にするのかとも思われるくらいである。床の間とこまには一度も掛替えたことのないらしい摩利支天まりしてんか何かの掛物がかけてあつて、渋紙色しぶがみいろに古びた安箆やすだんすの上には小さな仏壇が据えられ、長火鉢にはぴかぴかに磨いた吉原五徳よしわらごたくに鉄瓶てつびんがかかつている。こういう道具から老婆の年齢も大方想像がつくであろう。老婆が口ずから語る所によれば、日露戦争の際陸軍中尉であつた良人おつとが戦死してから、下女奉公に行つたり派出婦になつたりまた手内職をしたりして、一人の娘を養育したが、その娘は幸いにも資産のある貿易商の妻になり、夫婦とも現在は亞米利アメリカ加カに居住かしていて、老婆には不自由のないように仕送りをしているとの

事である。しかし人の噂では、娘からの仕送りは真実であるが、娘は始め西洋人の妾になり子供が出来てそのまま旦那の本国へ連れられて行ったのだともいう。いずれが真実やら、清岡は定めかねているのみならず、君江が始めどうしてこの家の二階を借りたのやら、そして何故、もっと場所柄のいい綺麗な家へ引移らずにいるのやら、その事情もはっきり知ることが出来ないのである。老婆は中尉の妻だったというが、現在の様子や物の言いざまから見れば、本所浅草辺の路地裏によく見るような老婆で、生れも育ちも好くない事は、酒屋の通帳がやっと読める位。洋服を着て鬘を生した人をわけもなく尊敬する事などから万事は大抵想像されるのである。清岡はこの老婆に向って、自分の来ない間君江が何をしているかを、今更きいて見たところで、何の得るところもないだろうと思っているので、日頃の鬱憤などは顔色にも現わさず、努めて機嫌のいい調子をつくり、

「カフェーへ行くといろいろな人に逢うんで実に困るのだよ。だから夜は前を通ってもなりたけ入らないようにしているのさ。」

「それが能御在ますよ。御身分のある方はつい人が目をつけて、何の彼のと噂をしたがるもんですからね。オヤもう十一時ですね。」と婆は隣の時計の鳴る音を聞きつけ、筆筒の上の八角時計を見上げ、

「旦那、もう一時間お待ちになればいいんでしょう。待ってお上げなさいませよ。火鉢に火でもついて置きましょう。」

「おばさん。何も今夜にかぎった事じゃない。あしたゆつくり来るからさ。」と清岡は敷島の袋を袂に入れたが、婆は最初から清岡が時ならぬ時分この近所を徘徊していたらしい様子といい、また日夜見知っている君江のふしだらを思合せて、大抵それと察しながら、これもわざと気のつかない振をして、

「それでも旦那、お待たせして置かないと、後あとで君江さんに叱おとられますから。」

「だまっていれば知れやしない。」

「それでも何だかわたしの気がすみませんからさ。酒屋の電話をかりて掛けて来ましょう。」と婆は長火鉢の曳ひきた出しをさぐって、電話番号をかいた紙片かみきれを取り出した。

「それじゃ、とにかく帰るまで二階にごろごろしていよう。十二時には帰って来るにきまつているんだから、電話なんぞ掛けないでもいいよ。」と清岡は立ちかけて、「おばさん、留守番をしているから、何なら湯へ行ってお出いで。」

清岡は老婆を銭湯にやり、二階へ上って、秘密の手紙でもあつたら手に入れようという下心。老婆は前々から不意の事が起つたら電話で知らせるようと君江からくれぐれも頼まれているので、銭湯への道すがら酒屋か薬屋から電話をかけるつもりで、電話番号の紙片を帯の間にはさみながら出て行った。

「#5字下げ」七「#「七」は中見出し」

おばさんから電話がかかった時、君江は折よく電話室に近いテーブルのお客と飲んでいたので、呼ばれるが否や、すぐに立って電話を聞いたが、もう三、四十分で店のしまう刻限、大分酔が廻っている上に、あたりの騒々しさに、清岡先生の来ていることだけは通じたけれど、それについておばさんのくどくど言うことは一向に聞取れなかった。とにかく

今夜は清岡さんの来べき晩ではなく、かつまた前以て何のたよりさえなかつたところから、君江は安心して既に宵の口に木村義男という洋行帰りの舞踏家とどこへか泊りに行く約束をしてしまった所へ、その後二、三度馴染なじみになった自動車輸入商の矢田さんが来て、カッフェーの帰りに春代と百合子の二人をも誘つて、松屋呉服店の裏通にこの頃開店した麗々亭れいれいていとかいうおでん屋へ是非とも寄つてくれ。外に約束があるなら一時間でも三十分でもよいからと言って、一度外へ出てから、今方いまがた再び立戻つて来て、四、五人の女給にいろいな物を食べさせている最中である。これと殆どほとん前後して、いつもカッフェーなどへは来た事のない松崎さんという老紳士が今夜にかぎつてひょっくり姿を現した。尤ももつと東京駅へ人を送りに行つた帰りだという事である。

銀座通のカッフェーはこのドンフワンに限らず、いずこも十時過ぎから店のしめ際になつて急に込み合つて来るのが常である。絶間たえまなく鳴りひびく蓄音機の音も、どうかすると掻消かきけされるほど騒さわしい人の声やら皿の音に加えて、煙草の烟けむりや塵ちりほこりに、唯さえ頭の痛くなる時分、君江は自分ながらも今夜は少し酔い過ぎたと思つて矢先、目の前には三人の男が落ち合ったのみならず、家の方にも待つてゐるものがある。聞いて、どうしてよいのやら、殆ど途法とほうに暮れてしまった。今夜にかぎつて、どうしてこうも都合が悪るいようになつたのだらうと、自分の身よりも罪のない他人を恨むばかり。一層この場で酔いつぶれてさえしまえば周囲の者が結句どうにか始末をつけてくれるだらうと、君江は松崎老人テイブルの卓たいに来て、

「今夜わたしべるべろに酔つて見たいのよ。オトカを飲まして頂戴ちやうだい。」

「何かいざこざがあるな。お客と喧嘩けんかでもしたのか。」と松崎は年を取つてゐるだけ、すぐに気がついたらしい。

「いいえ。そうじゃないのよ。だけれど。」

「だけれど。やっぱりそういう訳じゃないかね。」

君江は返事に窮こまつて黙もつてしまったが、その時ふと、この老人とは女給にならない以前からの知合しりあいで、身の上の事は何も彼も承知している人だから、内々打明けて相談した方がよいかも知れないと思いついた。折好くテーブルには一人も女給がないので、君江はびったり寄添い、「今夜、わたしこまこまつてしまったのよ。こんな都合のわるい事は始めてだわ。」

その語調と様子とで、松崎は忽たちまち万事を洞察したらしく、「おれはもうすぐ帰るつもりだよ。今夜は唯カツフェーの景気を見物に来たばかりさ。逢あうのはその中うちゆゆっくり昼間にしよう。」

「すまないわねえ。あなた、怒らないで頂戴。よくつて。」

「おこるものか。おれにはもう分わつている。お客がかち合あっているんだらう。」

「さすがに小父おじさんだけあるわねえ。どうして分わるんだらう。」と君江は松崎の耳に口を寄せて今夜の始末を包まずに打明け、「何かうまい工夫はないか知ら。」

「いくらでもあるさ。わけはない。」と松崎はすぐに一策を授けた。それは先カますツフェーの帰り大急行で一人のお客を待合へ連れて行き、どうしても泊るわけには行かないからと、暫しばしくしてから、男が帰り仕度しどをしない中、お先へ失礼と言ってあわてて帰る振りぶりで、別の座敷へ姿をかくす。その前に極く懇意な友達の女給に頼んで市ヶ谷の家へ寄よってもらい、間貸しのおばさんに、或あるお客様が自動車自動車で送おつてやるからと言うので、何の気もなく一緒に乗のつたところ、無理やりに待合へ連れて行かれた。仕様がなから芸者を呼ばせお酒だの御料理だの取らせている間に、自

分だけ隙を見て逃げ出して来たのだから、急いで君江さんを迎いに行つてくださいと、言うのだ。そうすればきつと清岡が自身でその待合へやって来るにちがいはない。それまでにたつぷり一時間あまりはかかるから、その間にお客の一人位お前の腕ならどうにでも始末はつけられるはずだ。もう一人のお客には、人目を憚るからと口実を設けて、一人先へ別の家へ行かして、気の毒だが、その方はそれなり寐こかしを喰わしてしまうのだ。勿論その時はひどく怒るだろうが、怒るほど内心未練が強くなるのにきまつているから、翌日必恨みをいいにやって来る。その時思うさま嬉しがらしてやれば効果はむしろ平穩無事の時より以上になるだろう。松崎は刈り込んだ半白の口髭を撫でながら、微笑して、「しかし、こういう仕事をするには、呑込の早い、気のきいた家でなくっちゃいけない。心安い家でうまい処があるか。」

「そうね。牛込の彼処はどう。諏訪町時分にあなたとも二、三度行った家さ。この頃三番町にもちよいちよい往くところがあるのよ。」

その時持番の女給が来たので、君江は取りとめのない冗談を言いながら立つて行った。松崎はもう半時間ばかりたてば戸をしめる時間になるので、その間に君江のお客はどんな人か。また君江が果してどういう行動を取るかをも見究めたいような心持もしたが、それまで自分がここに居坐つていてはやりにくかろうと察して、ほどなく勘定を払って外へ出た。両側の商店は既に灯を消し戸を鎖している。夜肆も宵の中雨が降っていたのと、もう時間がおそいのとで、飲みくいする屋台店が残っているばかり。銀座の大通りは左右のひろい横町もともども見渡すかぎりひっそりして、雨気を含んだ闇の空と、湿った路の面に反映するカッフェーや酒場の色電燈が目につくばかりである。劇場や興行物は既に一時間ほど前には閉場しているので、今頃ぶらぶら歩いている男女は悉くカツ



フエーへ出入するものとしか思われぬ。通り過る電車は割合にすいていて、辻自動車ばかりが行先の見えぬほど街の角々に徘徊している。

松崎は今ではたまにしか銀座へ来る用事がないので、何という事もなく物珍しい心持がして、立止るともなく尾張町の四辻に佇立んだ。そしてあたりの光景を觀望すると、いつもながら今更のようにこの街の変革と時勢の推移とに引きつづいてその身の過去半生の事が思返されるのである。

松崎は法学博士の学位を持ち、もと木挽町辺にあつた某省の高等官であつたが、一時世間の耳目を聳動させた疑獄事件に連坐して刑罰を受けた。しかしそれがため出獄の後には生涯遊んで暮らせるだけの私財をつくり、子孫も既に成長し立身の途についているものもある。疑獄事件で収監される時まで幾年間、麹町の屋敷から抱車で通勤したその当時、毎日目にした銀座通と、震災後も日に日に變つて行く今日の光景とを比較すると、唯夢のようだというより外はない。夢のようだというのは、今日の羅馬人が羅馬の古都を思うような深刻な心持をいうのではない。寄席の見物人が手品師の技術を見るのと同じような軽い賛称の意を寓するに過ぎない。西洋文明を模倣した都市の光景もここに至れば驚異の極、何となく一種の悲哀を催さしめる。この悲哀は街衢のさまよりもむしろここに生活する女給の境遇について、更に一層痛切に感じられる。君江のような、生れながらにして女子の羞耻と貞操の觀念とを欠いている女は、女給の中には彼一人のみでなく、まだ沢山あるにちがいない。君江は同じ売笑婦でも従来の芸娼妓とは全く性質を異にしたもので、西洋の都會に蔓延している私娼と同型のものである。ああいう女が東京の市街に現れて来たのも、これを要するに時代の空氣からだと思えば時勢の変遷ほど驚くべきものはない。翻つて自分の身を省れば、あの当時、法廷に引

出されて流職とくしよくの罪を宣告せられながら胸中には別に深く愧はじる心も起らなかつた。これもまた時代の空気のなす所であつたのかも知れない。月日はそれから二十年あまり過ぎている。一時はあれほど喧かしましく世の噂に上つたこの親爺おやぢが、今日泰然として銀座街頭のカツフェーに飲んでいても、誰一人これを知つて怪しみ咎とがめるものもない。歳月は功罪ともにこれを忘却の中に葬り去つてしまふ。これこそ誠に夢のようだと言わなければなるまい。松崎は世間に対すると共にまた自分の生涯に対しても同じように半は慷慨なつかし半は冷嘲れいちょうしたいような沈痛な心持になる。そして人間の世は過去も将来もなく唯その日その日の苦楽が存するばかりで、毀誉きよも褒貶ほうへんも共に深く意とするには及ばないような気がしてくる。果して然しかりとすれば、自分の生涯などはまず人間中の最幸福もつともなるものと思わなければならぬ。年は六十になつてなお病やまいなく、二十はたちの女給とらを捉とらえて世を憚はばからず往々青年の如く相戯れて更に愧はじる心さえない。この一事だけでもその幸福は遙はるかに王侯まへに優まさる所があるだろうと、松崎博士は覺えず声を出して笑おうとした。

\*

\*

\*

\*

君江は舞踊家木村義男と牒しめし合して、カツフェーを出てから有楽橋うらぎはしの暗い河岸かじ通りで待合せ、自動車で三番町の千代田家という懇意な待合へ行つた。そして松崎のおじさんから教えられたように先へ帰る振りをして別の小座敷に姿をかくし、素知らぬ顔で清岡先生を迎えるつもりであつたが、車の道すがら話の様子で、君江は木村が案外さばけた男で、女給には恋人の二人や三人あるくらいあたりまえの事は当前だと思つていらしいので、千代田家の裏二階へ通ると、すぐさま今夜の始末をそのまま打明けてし

まった。すると、木村は案の定どこまでもおとなしく、

「始めから打明けてくれれば、こんな心配をさせなくつてもよかつたのに。許してくれたまえ。僕がわるかつたんだ。その代り今度都合のいい時ゆっくり逢つてくれたまえ。」

木村はわざと追立てるように君江をせき立て、手つだつてその帯まで結んでやつた。

君江は始め邦楽座の舞台で活動写真の幕間まくあいに出演する木村の技芸を見た時から例の好奇心に駆られていたので、このまま別れるのが物足りなくしてしようがない。木村の技芸というのは彼自身雑誌や新聞などに書いている議論によれば、露西亞ロシアの舞踊ニジンスキイ以後の芸術と、支那俳優の舞技と、即東西すなわち兩種の芸術を渾和こんわしたとか称するもので、男女両性の肉体的曲線美の動揺は、絵画彫刻の如き静止した造形美術の効果よりも遙はるかに強烈で、また音楽が与える直感的な暗示の力よりも更に深刻だといつのであるが、しかし女給さんの君江にはそういう審美学上の議論はどうでもよい。若い男と女とが裸体になつて衆人の面前で時々抱き合いながらさまざまな姿態を示すのを見て、君江はああいう事を商売にしている男と逢つて見たらばどんなだろうと思つたのである。その心持はあはずれた芸者が相撲を羸ひいき肩かたにしたり、また女学生が野球選手を恋するのと変りがない。

「先生。もうおそいから真直まっすぐにお帰りじゃないんでしょう。きつと何処どこかへお寄りになるのよ。口惜くちやしいわねえ。」

「だって、パトロンが来るんじゃ仕様がなないじゃないか。僕はすぐ家へ帰る。虚言うそだと思つたら電話をかけて見給え。」と名刺を渡して、「君江さん。この次きつと逢つてくれるねえ。」

「あなたもよ。きつとよくつて。わたし何だかほんとに濟まないような

気がして、お帰ししたくないのよ。」と君江は例の如く新しい男に対する興味を押える事ができないので、既に帰仕度をしかけた木村の膝ひざによりかかってその手を握った。

暫しばらくしてから君江は木村の帰る自動車を頼もうと、女中を呼びに廊下へ出て、時間をきくと今方二時を打った。そして清岡さんというお客様はまだお見えにもならず、また電話もかからないと言う。自動車が来たので舞踊家の木村先生はお帰りになる。小説家の清岡先生はそれなり二時半を過ぎてもお出いでにならない。君江はカッフェーの仕舞しま際に瑠璃子るりこという女給に市ヶ谷へ立寄って伝言ことづけをするように頼んだのである。瑠璃子はもと洋髪屋の梳手すきてをしている時分から方々の待合へも出入をしていたので、こういう事には抜目のあるうはずがない。事によると、清岡先生は瑠璃子の伝言を聞かない先に怒って早く帰ってしまったのかも知れない。そう思うと君江は木村を帰すのではなかったものと、いよいよ残り惜しくてたまらなくなつて来た。帯の間に入れた名刺を見ると、その住処、昭和アパートメントの電話番号が記してあるので、前後の考かんがえもなく電話をかけて見ようと裏梯子うらばしこを降りかけた時、表口の方で誰かお客様の来たらしい物音がした。清岡先生にちがいないと、君江は耳をすまして表二階へ上る人の声を聞くと、清岡ではなくて、思いもかけない矢田さんらしい。矢田さんにはカッフェーのテーブルで、今夜はいくら誘われても先約があるから裏通りのおでん屋麗々亭へは行かれないがその代り少しおそくなつてからならば、何処へでも行かれるから、行先を教え先へ行って待っていて下さいと虚言うそをついて、それなり寐こかしを食わしてしまうつもりであつたのだ。

矢田の方では君江のいう事を真まに受け、最初の晩君江をつれて行った神楽阪裏かぐらざかの待合へ行き、二時過まで待ちあぐんでいたが、電話さえかか

て来ないので、矢田は形勢を察し、十日ほど前君江がカツフェーの行掛けに自分を連れて行った三番町の千代田家の事を思合せて、万一まぐれ当りにさがし当てたら、腹いせに騒いで邪魔をしてやろうと、突然自動車を乗りつけたのである。門をたたくと直様女中が雨戸をあけたので、矢田は鎌をかけて君江さんとは聞くと、女中はつきり君江の待っている旦那だと思込んで、

「奥様は先刻からお待ちかねなんですよ。殿方はほんとに罪だわねえ。」という返事。矢田は烟に巻かれて何とも言えず、おとなしく二階へ上り、帽子もとらず床の間に胡坐を置いて不審そうに座敷中を見廻していた。

君江は裏梯子の下で女中から様子をきき、今はどうする事も出来ない  
と覚悟をきめ、いきなり座敷の襖をあけると共に、

「矢さん。あなた。あんまりだわよ。」と鋭い声で叱りつけた。

矢田は今方女中の返事に驚かされた後、またしても意外な君江の様子に、何とも言わず、目ばかりぱちぱちさせている。

「わたし、もう帰ろうかと思つたのよ。」と君江はきちんと坐つて俯向いた。

「一体どうしたというんだ。」と矢田は始めて心づいたらしく帽子を取り、「何だか、さっぱり訳がわからない。」

君江は俯向いたまま黙つて膝の上にハンケチを弄んでいる。女中が上り花を運んで来て、

「ほんとにお待ちになつていらしたんですよ。お銚子をおつけ致しますようか。」

「もう、おそう御在ますから。」と君江は妙に声を沈ませて、「こんなにおそくまで。ほんとに済みません。」

「おそいのは、もう馴れております。それでは。どうぞ。」と女中は矢田の帽子と夏外套とを持って立ちかけるので、矢田はとやかく言うひまもなく、案内されるがまま、先刻舞踊家のいた座敷とも知らず、黙って裏二階の四畳半に入った。

\*

\*

\*

\*

短夜の明けぎわにざっと一降り降って来た雨の音を夢うつつの中に聞きながら、君江は暫くうとうとしたかと思うと、忽ち窓の下の横町から、急に暑くなったわねえという甲高な女の声と小走りにかけて行く下駄の音に目をさました。軒に雀の囀る声。やや遠く稽古三味線の音。表の方ではたばた掃除をする戸障子の音と共に、隣の屋根に洗濯物でも干しに上るらしい人の跣音がする。雨はすっかり晴れて日が照り輝いていると思うと、昨夜のままに電燈のついている閉切った座敷の中の蒸暑さが一際胸苦しく、我ながら寐臭い匂いに頭が痛くなるようなので、君江は夜具の上から這い出して窓の雨戸を明けようとした。矢田は既に昨夜のかわけもなく機嫌を直していた後なので、

「お止しよ。僕があける。実際暑くなったなア。」

「こら。こんなよ。触って御覧なさい。」と君江は細い赤襟をつけた晒木綿の肌襦袢をぬぎ、窓の敷居に掛けて風にさらすため、四ツ匳いになって腕を伸す。矢田はその形を眺めて、

「木村舞踊団なんかよりよほど濃艶だ。」

「何が濃艶なの。」

「君江さんの肉体美のことさ。」

君江は知らぬが仏とはよく言ったものだと言いたくなるのをじつと耐

えて、「矢さん。あの中に誰かお馴染があるんでしよう。みんな好い身体からだしているわね。女が見てさえそう思うんだから、男が夢中になるのは当前だわねえ。」

「そんな事があるものか。舞台上見るからいいのさ。差向さむかいになつたらおはなしにならない。ダンサアやモデルなんていうものは、裸体になるだけが商売なんだから、洒落しゃれ一つわかりやアしない。僕はもう君さん以外の女は誰もいやだ。」

「矢さん。そんなに人を馬鹿にするもんじゃなくつてよ。」

矢田はまじめらしく何か言おうとした時、女中が障子の外から、「もうお目覚めざまですか。お風呂がわきました。」

「もう十時だ。」と矢田は枕まくらもとの腕時計を引寄せながら、「おれはちよつと店へ行かなくつちやならないんだけど、君さん、今日は晩番おそばんか。」

「今日は三時出なのよ。暑くつて帰れないから、わたしその時間までここに寐ねているわ。あなたもそうなさいよ。」

「うむ。そうしたいんだけど。」と考えながら、「とにかく湯へはいろう。」

矢田は自分の店へ電話をかけ、どうしても帰らなければならぬ用事が出来たというので、朝飯も食わず、君江を残して急いで帰って行った。

その時はかれこれ十二時近くになっていたが、今だに清岡の様子がわからないので、君江は平素ふだんから頼んである表の肴屋さかなやに電話をかけ、間貸まかしのおばさんを出して様子をきくと、昨夜お友達の女給さんが見えて、先生はその女と一緒に出かけになったきりだという返事である。君江は事によると先生と瑠璃子と出来合ったのかも知れない。それでこつちへは姿を見せないのだろうと思つた。しかし唯ただそう思つただけの事で、君江はそれについてとやかく心を勞する気にはならなかつた。十七の秋家

を出て東京に来てから、この四年間に肌をふれた男の数は何人だか知れないほどであるが、君江は今以って小説などで見るような恋愛を要求したことがない。従って嫉妬しつとという感情をもまだ経験した事がないのである。君江は一人の男に深く思込まれて、それがために怒られたり恨まれたりして、面倒な葛藤かっとうを生じたり、または金を貰もらったために束縛を受けたりするよりも、むしろ相手の老弱美醜を問わず、その場かぎりの気ままな戯れを恣ほしにした方が後くされがなくて好いいと思っっている。十七の暮から二十はたちになる今日が日まで、いつもいつも君江はこの戯れのいそがしさにのみ追われて、深刻な恋愛の真情がどんなものかしみじみ考えて見る暇がない。時たま一人子然ぼっねんと貸間の二階に寝ることがないでもないが、そういう時には何より先に平素の寝不足を補って置こうという気になる。それと同時に、やがて疲労の恢復かいふくした後おのずから来るべき新しい戯れを予想し始めるので、いかなる深刻な事実も、一旦睡ねむりに陥おちるや否や、その印象は睡眠中に見た夢と同じように影薄く模糊もごとしてしまうのである。君江は睡からふと覚めて、いずれが現実、いずれが夢であったかを区別しようとする。その時の情緒と感覚との混淆こんごうほど快いものはないと述べている。

この日も君江はこの快感ちんめんに沈湎うたなして、転寐うつたなから目を覚めた時、もう午後三時近くと知りながら、なお枕から顔を上げる気がしなかった。枕もとを見れば、昨夜脱ぎ捨てた着物や、解きすてた帯紐おびひもに取乱されている裏二階の四畳半は、昨夜舞踊家の木村が帰った後、輸入商の矢田が来て、今朝方帰りがけに窓の雨戸一枚明けて行ったままで、消し忘れた天井の電燈さえまた昨夜と同じように床の間の壁に挿花さしはなの影を描いている。懶ものうい稽古唄や物売の声につれて、狭間ひあわいの風が窓から流れ入って畳の上に投げ落した横顔なでを撫なでる心地好き。君江は今こういう時、矢田さんでも誰で



もいいから来てくれればいい。そうすればありとあらゆる身内の慾情を投げかけてやるうものと思うと、いよいよ湧起る妄想の遺瀨なさに、君江は軽く瞼を閉じ、われとわが胸を腕の力がぎり抱きしめながら深い息をついて身もだえした。その時静に襖の明く音がして、屏風の前に立った男の姿を、誰かと見れば昨夜から名残惜しく思っていた木村義男である。

「あら。」と君江はわずかに顔を擡げながら、起直りもせず、仰向きに臥たまま両腕をひろげ、木村が折屈むのを待つて、ぐつと引寄せながら、「わたし、夢を見ていたのよ。」

暫くして後木村は昨夜銀細工の鉛筆を落したから、もしやと思つて捜しに来たことを告げた。

二人は起きて、表座敷で料理の肴に箸をつけた時、女給の瑠璃子から電話がかかった。瑠璃子は昨夜君江から頼まれた通り、狼狽した振りでは本村町へ行き、清岡先生に三番町の千代田という家へ行った事を告げると、先生は俄に不快な顔色をして、いろいろ弁解するのも聴かず、途中から自分を振捨てどこへか行つてしまった。その事を知らせたいと思つて今まで君江の来るのを待つていたが、三時の出番にも姿が見えないので、最初に肴屋へ呼出しの電話をかけ、おばさんの返事から推量して、更に電話をかけて見たという事である。

日が暮れて飯を食べてしまうと、木村は明日丸円劇場の初日なので、これから稽古に行かなくてはならないと、急いで仕度をした後、特等の座席券を五、六枚、カツフェーの女給さんたちに売ってくれと頼んで、そのまま晩飯の代も自動車賃も払わずに帰つてしまった。

君江はまるで落語家か芸人などと遊んだような気がして、俄に興が覚め、折角きよう一日夢を見ていたような心持はもう消え失せてしまった。

折からたつぷり日が暮れると共に、今のところ何の当もない今夜一晩の事が急に物さびしく思われて来た。女一人では待合にもいられないので、木村の飲み食した勘定を仕払って外へ出ると、横町は丁度座敷へ出て行く芸者の行来ゆききの一番急いそがしい時分。今頃おくれてカツフェーへも行かれな  
い、と行って、家へ帰っても仕様がなかったので、思出すまま桐花家の京葉をたずねて見ようと、四角よっかどを曲りかけた時、向から座敷着つまの襦じゆばんを夕風すそに翻しながら来かかる一人の芸者。見れば京葉である。

「君ちゃん。これから銀座？」

「もう晩おそくなつたから休もうと思つてるの。」

「あなた。千代田家さんにいたんじゃないの。」

「あら。どうして知つてるの。」

「どうしてじゃないことよ。君ちゃん。あすこはいけないよ。昨夜わたし清岡先生にもお目にかかつたのよ。」

「あら。そう。」と君江もさすがに目をみはつた。

「ゆうべ、宵うちの中に野田家さんでお目にかかつたのよ。三、四人お連つれがあつたわ。わたしは後口あとくちで廻つて行つたもんだから、ちよつとお目にかかつたばかりなのよ。だから、その時にはどなたただか気がつかかなかつたのよ。だけれど、わたしお連の方に出たもんだから、後ですつかり話をきいてしまったのさ。お前さんがちよいちよい千代田家さんへ行くことを能く知よっている芸者衆があるんだよ。家が隣合となりあっているものだから、窓からよく見えるんだとさ。お座敷でその芸者衆が先生とは知らずにお前さんのほなしをしたんだとさ。何しろ此処こゝじゃほなしができないから、わたし明日あしたかあさつて、おばさんにも用があるから、ゆつくり行つて話をするわ。とにかくあすこはよした方がいいよ。」

「そう。そんな事があつたの。じゃ待つてるわよ。」  
 近処の犬だの、箱屋だの、出前持だの、芸者などが、絶え間なく通過するので、二人は立談もそこそこに右と左へわかれた。

「#5字下げ」八「#「八」は中見出し」

良人の起るのは大抵正午近くなので、鶴子は毎朝一人で牛乳に焼麩麩を朝飯に代え、この年月飼馴らした鸚鵡の籠を掃除し、盆栽に水を灌ぎなどした後、髪を結び直し着物をきかえて、良人の起るのを待つのである。その日の朝牛乳と共に女中の持つて来た郵便物の中に、番地も宛名も洋字で書いた一封があつたので、何心なく手に把ると、自分へ宛てたもので、その筆蹟にも見覚がある。女学校を卒業する前後二年あまり教を受けた仏蘭西の婦人マダム、シユールの手紙である。

マダム、シユールは東洋文学研究の泰斗として各国に知られている博士アルフォンス、シユールの夫人で、始め良人に従い支那に遊ぶ事十余年、日本に留ることまた更に数年にして一度本国に帰つたが、その後良人に先立れ孀婦となつた悲しみを慰めるため、单身米国を漫遊して再び日本に来て二年ほど東京にいた。鶴子が女学校の友達二、三人と語学と礼法とを学びに通つたのはこの折であつた。マダム、シユールは巴里で亡夫の遺著を出版するについて至急な用事が出来たので、四、五日前まともや日本に来て、帝国ホテルに投宿したから一度訪ねて来るようにというのであつた。

鶴子は進の起るのを待ち丁度正午の汽笛が鳴つた頃、電話で聞合せて

ホテルへ往った。

マダム、シユールは西洋の老女にはよく見るような円顔まるがおの福々しく類ほおの垂れ下った目の細い肥った女である。日常の日本語は勿論もちろん不自由なく、漢文も少しは読める。『説文せつもん』で字を引く事などは現代日本の学生の及ばぬところかも知れない。

丁度食事の頃だったので、マダムは昼餉ひるげのテーブルに鶴子を案内して、亡夫の遺著を編輯へんしゅうするについて、第一に社寺または古器物の写真の不足しているのを補うためにこれを買集める事、第二には仏蘭西の本邸たくわに儲えてある東洋の書画しょがさいせき載籍の整理を依頼するため適当な日本人をさがして本国へ同行したいという事を語った。

鶴子はどの位学識があればよいのかと問うと、別に専門の学者を望んでいるのではない。譬たとえば和歌と端唄はうたとの区別を知っている位の程度でよいのであるが、学問よりもむしろ日本固有の趣味と鑑識とを具備した人で、かたがた幾分なりと仏蘭西語を知っていれば申分はないのだという。マダムはなお言葉をつづけて、

「半年ぐらいで仕事はすみませす。あなたがお一人で遊んでおいででしたら、是非ともお頼みするのですけれど、今ではそんなわけには行きませんから、誰か御存じの方をさがしていただかなければなりません。」

この言葉を聞くと共に、鶴子は食卓を押し出さんばかり、殆我ほとんどを忘れて半身を突き出し、「わたくし、半年や一年ぐらいなら……わたくしのよくなものでもお役に立ちますのなら、どんな都合をしても御一緒に参りたいと存じます。」

「あなた。おいでになれますか。」とマダムも驚きと喜びとにその目を見張った。

「一度はどうかして洋行して見たいと思っておりますから。」と鶴子

は一時に湧起る感情を見せまいとして努めて声を沈ませた。

鶴子は今朝マダム、シユールの手紙を受取り、このホテルに来て食卓の椅子につく時まで、自分の生涯にかくの如き大変動が起ろうとは夢にだも思っていないかった。運命ほど測りがたいものはない。鶴子はマダム、シユールの談をきいている中、突然何物かに誘惑せられたように、唯ふらふらと遠いところへ往きたくなつたのである。往つた先の事はよかれあしかれ、鶴子は今住む家の門を出る事が自分の生涯をつくり直す手始だと日頃から心づいてはいたものの、きょうが日までこれを決行する機会がなかった。一時は深く絶望して何事も皆自分が為した過の報いのみ思いあきらめ、一日も早く年をとつて、半生の悔いと悲しみとを茶のみばなしにする日の来る事を待つより外はないと思つていたが、今突然意外な機会が目の前に現われて来たのを見ては、とかくの思慮を費す暇もない。日頃因循していただけ、障碍が起つたなら、極力これを排斥し、て思うところを決行しようという元気さえ出て来たような心持になつた。

食事の後廊下の長椅子に並んで腰をかけ珈琲を啜りながら、懇談することまた一時間ばかり。鶴子はホテルを出て梅雨晴の俄に蒸暑くなつた日盛りをもちとわず、日比谷の四辻から自動車を傭つて世田ヶ谷に往き良人の老父をたずねて、洋行のはなしをすると、老父はかつて大学教授のころ両三度シユール博士に面談した事があるといつて、「あつちへ行つてから書物の事で何かわからない事があったら遠慮なく手紙で問合せるがよい。」というような次第であつた。鶴子はいよいよ門出の幸あるを喜び、夏の夕陽のまだ照り輝いている中、急いで家へ帰り良人の承諾を求めようと思うと、良人は既に外出した後で、その夜十二時近くなつてからいつものように今夜は晩くなるから先へ寝てくれるようにとの事であつた。仕様がなないので、鶴子はその夜は先に寝て、翌朝は良人の起る

まで待つているわけにも行かないところから、マダム、シユールから依頼された用事のある事だけを一筆認めて、再びホテルへ出かけた。マダムは次の日に京都へ行き奈良に遊び、二、三日長崎に滞在して神戸に立戻つて便船を待つつもりであるから、その日までに仕度をしてその地のホテルへ来てくれるようにと、日割を明細に書いて見せてくれた。そして鶴子が旅行免状の事は至急運びがつくように大使館から直接その筋の役所へ交渉してもらおう手筈だという事であつた。

鶴子が良人に逢つて始めて洋行の事を打明けたのは次の夜も世間は既に寝静つた頃であつた。進はどこかで飲んで来た酒の酔も一時に醒めるほど驚いたらしいのを、わざとさり気なく、

「そうか。それは結構だ。行つて来るがいい。」

「半年という約束で御在ますけれど、都合でもっと早く帰りたいたいと思つております。」

「別に急いで帰るにも及ばない。二度出掛けるのも大変だから、ゆっくり勉強したり見物したりして来る方がいい。」

二人のはなしはそれなり途切れてしまった。進は鶴子が洋行する胸中を推察して今更引留めても既におそいと思つたので、未練らしい様子を見せて、「それ御覧なさい。その位なら平素からもう少し大事にしてくれればよいのに。」と思われるのが無念である。そうかといつて、「お前のいなくなるのを待つていたのだ。」と思わせるほど冷静な態度を取るのも、かえつて腹の底を見すかされるような気がする。いずれともつかぬ曖昧な態度を取るに若くはない。とそう考えたのは、鶴子の身になつてもやはり同じことであつた。あまり名残を惜しむような様子を見せて、無理に引留められても困るし、といつて、あまり冷淡にして、それがため軽薄無情な女だと思込まれるのは元より好むところでない。夫婦は互

に顔色を窺い、できるかぎり真実の事情には触れないようにして、平和に体よくこの場をすませてしまいたいと心掛けたのである。

一週間ばかりの後、鶴子は夕方神戸急行の列車に乗った。始め進の友人間には送別会を催すようなはなしが起らないでもなかったが、鶴子は実家へ対して新聞などに自分の名の出るような事はなるべく避けたいからといって固く辞退したので、その夕東京駅まで見送りに行ったものは、良人の進と門生の村岡と、書生の野口という男の外には、鶴子の学友でいずれも相応のところへ嫁しているらしい婦人二、三人だけであった。実兄は窃に旅費を贈ってもいいといったほど好意を持っていたが、世間を憚って見送りに行かず、世田ヶ谷の老人もまた頽齡をいいわけにして出て来なかった。

列車が出発すると、進を始め男二人と婦人たちとは自然別々になってプラットフォームを降口の方へと歩みはじめたが、村岡一人はいつまでも帽子を片手に列車の行衛を見送ったまま立っている。進は見返りながら、

「おい。村岡。何をぼんやりしているのだ。」

「実にさびしい出発でしたな。」と村岡は既に人影のなくなったプラットフォームを見廻しながら初めて歩み出した。

「彼の女の生活もこれで第一篇の終を告げたのだ。」と進は吸いかけの巻煙草を線路の方へ投捨てた。

「でも、半年たてばお帰りになるんでしょう。」

「いずれ帰るだろう。しかし恐らく僕の家へは帰って来ないだろう。」

「先生。僕も実はそういう気がしたんです。一種の暗示ですね。」

「おい。村岡。君はどうして彼女のツバメにならなかったんだ。おれには能くわかっていた。彼女は君のような感傷的な比較的純情な青年を要

求していたんだぜ。」

村岡はまだ三十にはならない青年なので、顔を真赤にして、「先生。そんな冗談を。うそですよ。そんな事は。」

「はははは。帰って来てからでも遅くはあるまい。」と進は始めて面白そうに笑った。

改札口へ来かかると俄に混雑する人の往来に、談話もそのまま、三人は停車場の外へ出た。吹きすさむ梅雨晴の夜風は肌寒いほど冷である。

「おい。野口。まだ早いから活動でも見て帰るがいい。ここに招待券があるから。」と進は書生を遠ざけてから、村岡と連立って丸ビル下の往来をぶらぶら当てもなく歩いて行く。村岡は突然思出したように、

「先生。ドンフワンはあれツきりなんですか。」

「うむ。すこし考えていることもあるから。」

「どんな事です。」

「さア、別にまだはつきりした考もないんだがね。しかし君にはもう心配させないつもりだから、それだけは安心してたまえ。君はあんまり善人過るから。」

「そうでしょうか。」

「どうかすると、まるで田舎の老人見たような事を言うからな。」

「それでも、僕には君江さんはそんなに憎むべき女だとは思われないんですよ。」

「君は傍観者だからさ。僕だってそれほど深く憎んでいるわけでもない。唯癪にさわるんだ。復讐だとか報復だとかいうほど深い意味じゃない。唯すこしいじめてやろうと思っっているんだ。僕の考えている事をはなしたら、君はきつと残酷だとか人道にはずれているとか言うにちがいない。」



「どんな事です。」

「君を信用しないわけではないが、今話をするわけには行かない。」

「警察へ密告でもするといふんですか。」

「ばかな。そんな事をしたって、あいつは何とも思やしない。拘留された所で二、三日たてば出て来る。女給でなくつてもあいつのする事はまだ沢山ある。僕はあいつが何なんにもする事ができなくなるようにしてやりたいたいと思っているんだ。それもおれが自身に手を下さずに、自然に他の人が手を下さすような、そういう機会をつくらせようと思っている。はははは。これは僕の空想だよ。イヤ、僕はこういう男の心理状態を小説にして見たいとこの間から苦心しているんだ。たしかバルザックの小説にあつたはなしだと思う。欺あそむかれた男が密夫みつぶの隠れた戸棚を密閉して壁を塗つて、その前で姦婦かんぶと酒を飲むはなしがある。僕の空想したのは、……僕僕の書こうと思つているのは、女を裸体にして自動車から銀座通のような町の上に投ほうり出してやりたい。日比谷公園ひびやの木の上に縛りつけて置くのも面白い。昔は不義の男女を罰するために日本橋にほんばしの袂たもとに晒さらし者にして置いた。それと同じような事さ。どうだろう。今の読者には受けないから。」

村岡は進が真実小説の腹案を語るのやら、または戯たわむに自分をからかうのやら、あるいはまた小説に托して君江に対する報復の手段をそれとなく語るのやら、その区別がつかない。唯何となく薄気味がわるく、総毛立つような気がするばかり。やっと気を取直して、

「いいでしょう。甘つたるい場面にはもう飽あきている時ですから。」

「女が恋人と寝ている処へ放火するのも面白いだろう。乱れた姿で外へ逃げ出すところを、火事場騒ぎにまぎれて女をつかまえ、どこか知らない処へつれて行って思うさま侮辱を与える……。」

「なるほど……。」

「まだ考えている事がある……。」

「先生。もう止してください。何だか変な心持になるから、もう止してください。」

「暴風になりそうだな。今夜は。」

空は真暗に曇って、今にも雨が降って来そうに思われながら、烈風に吹きちぎられた乱雲の間から星影が見えてはまた隠れてしまう。路傍の新樹は風にもまれ、軟なその若葉は吹き裂れて路の面に散乱している。唯さえ夜になれば人通りの絶がちな丸の内の道路は、この風とこの闇とに一際物寂しく、屹立する建物の間の小路から突然追剥でも出て来はせぬかと思われるような気がする。

「帝劇の女優が楽屋から帰り道に、車から引ずりおろされて脚を斬られたことがあった。犯人はわからずじまいだ。」

「そうですか。そんな事があったんですか。」

「寝ている中に黴菌をなすりつけられて盲目になった芸者もある。君江のような女は最後にはきつとそういう目に遇うだろう……。」

突然進がアツと叫んだので、村岡はびっくりして寄添うと、横合から吹つける風に、進は高価なパナマ帽子を奪い去られたのであった。

知らず知らず日々新聞社の近くまで歩いて来たので、二人はやや疲れたままその辺の小さなカップフィーに小憩みして、進はウイスキー村岡はビール一杯を傾け、足の向くまま銀座通へ出た。村岡は別れて帰ろうとするのを清岡は無理に引留め、今夜は顔を見知られていない裏通のカップフィーを観察しようと言出して、つづけざまに五、六軒飲みあるいた。どの店へ入っても四、五盃ずつウイスキーばかり飲みつづけるので、いつも強酒の清岡も今夜は足元が大分危くなった。それにもかまわずまた

しても通りすがりのカッフェーへ這入ろうとするので、村岡は清岡が羽織の袖を捉えながら、

「先生。もう止しましょう。カッフェーよりか、どこか外の処へつれて行って下さい。僕はもうくたびれてしまいました。」

「一体何時だ。」

「もう十二時です。」

「もうそんな時間か。」

「だから、もうカッフェーはつまりません。」と村岡はとにかく酔って清岡がこの辺を徘徊している事を危険に思い、それよりもどこぞの待合へでも上った方がまだしも安全だと考えて、「先生。もっとゆっくりした処で静に飲み直しましょうよ。」

「うむ。君もなかなか話せるようになった。何処でもいい。好きなところへ連れて行け。」

「じゃ、先生、車に乗りましょう。」と村岡は早速清岡の袖を引張って、土橋へ通ずる西銀座の新道路へ出ようとした。

「待て待て。」と清岡は真暗な建物の壁に向って立小便をしはじめたの

で、村岡は少し離れて曲角に立留った時、女給らしい女が三人つれ立つ

て、摺れちがいに通りかかったのをふと見ると、その中の一人はドンフ

ワンの君江である。君江の方でも村岡の顔を見て、アラとかオヤとか言ったらしかつたが、その声はまだ吹きやまぬ烈風に吹き去られて聞えなかった。村岡は咄嗟の間に、先刻丸の内を歩きながら清岡が言った事を思出し、何とも知れぬ恐怖を感じて、首と手を振って早く行けと知らせた。

いつになく乱酔した清岡が、人通のないこの裏通の角で突然君江の姿を見たら、何をしだすか知れない。新聞紙を賑すような騒ぎを引起しては大変だと心配したのである。

君江は村岡の心を察したのか、どうか分らぬが、そのまま通り過ぎて、三人連で向側の蕎麦屋へ這入りかけた時、丁度長小便をし終った清岡はひよろひよると歩み出で、向を眺めながら、「どこの女給だ。おれが行つておごつてやろう。」

村岡は驚いて袖にすがり、「およしなさい。変な男がついているようです。」

「かまうものか。おごつてやるんだ。」

「先生。およしなさい。」と村岡は力のかぎり抱き留めながら、通り過る円タクを呼留めた。この騒ぎに気がつかずにいたが、風に交つていつの間にもやら霧雨が降り出して見え、村岡は車に乗ってから窓の硝子の濡れているのに心づいた。

\*

\*

\*

\*

蕎麦屋を出てから自動車に乗ったのは瑠璃子、春代、君江の三人であった。瑠璃子が赤阪一ツ木で先に降り、次に春代が四谷左門町で降りると、運転手は予め行先を教えられているので、塩町の電車通から曲つて津の守阪を降りかけた。小雨のふり出した深夜のことで人通はない。君江は酔っているの、一人になると急に眠くなって覚えず瞼を合せたかと思つと、突然君子さんと呼ぶ男の声。びっくりして気がつくと自分と呼んだのは見も知らぬ運転手である。いやな奴だと思ひながら、大方女給同士の話から聞知つて冗談を言うのだからと、気にも留めず、「もう本村町なの。」

運転手はゆるゆる車を進めながら、「初めから君子さんにちがいないと思つていたんですよ。忘れましたか。諏訪町の加藤さんで二、三度お

「違あいしました。」と鳥打帽とりうちぼうをとり振返かえつて顔を見せた。

諏訪町の加藤というのは今富士見町に出ている京葉の事なので、君江はそこで知っているといるからには二度や三度出たお客にちがいないと思おもいながら、その顔はとうに忘れ果はてて思おもい出だせない。日頃君江はカツフェーの人ひと中で、もしその時分のお客と顔を見合せた場合、自分の取るべき態度については予め考えていないことはなかつた。しかし東京はさすがに広いもので、半年近くも稼かせぎ廻まわっていたにもかかわらず、銀座のカツフェーへ出てから今日まで一人もその時分のお客には出で違ちがわなかつたので、月日と共に一時の用心もおのずから忽ゆがせになつた時、今夜突然、自分の乗のっている車の運転手から呼び掛けられ、君江はさすがにびつくりはしたものの、知らぬ顔で押通おしすに若しくはないと思定しよめ、

「人ちがいでしょう。知らないわ。わたし。」

「君子さんの方じゃ、お忘れになるのも無理はありませんよ。円タクの運転手にまでなり下くだつてる始末だから。しかし君子さん女給にょぎになつたからつて、何もそうお高くとまるには及およばないでしょう。女給も高等も内実うちじつにおいては変りはないんでしょう。」

「下おろしてよ。ここでいいから。」

「雨が降ふっています。お宅たくまでは是非送おくらせて下さいな。」

「いいのよ。迷惑めいわくよ。」

「君子さん。あの時分は十円だつたね。」

「下くだせていうのに、何故下くださないんだよ。男が怖おそくつて夜道よみちが歩あけるかい。馬鹿ばかッ。」

君江の威勢いきせいに運転手は暴力を出しても駄目だめだと思おもつたのか、そのままおとなしく車を駐とめると、折ひからざつと吹ふッ掛けて来た驟雨しゅううに傘かさの用意よういのないのを、さも好いい気味きみだといわぬばかり。手を伸のして内うちから戸かどを明あけ

け、

「ここでいいなら。お下りなさい。」

「一円ここへ置きますよ。」と君江は五拾銭銀貨二枚を腰掛の上に投出して、戸口から降りようとするその片脚が、地につくかつかぬ瞬間を窺い、運転手は突然急速力で車を進めたので、君江はアツと一声。でんぐり返しを打って雨の中に投げ出された。

「ざまア見る。淫売め。」と冷罵した運転手の声も驟雨の音に打消され、車は忽ち行衛をくらましてしまった。

君江は気がついて泥の中に起直つて、あたりを見ると、投出された場所は津の守阪下から阪町下の巡查派出所へ来る間の真暗な道だと思いの外、まるで方角のわからない屋敷町の塀外であつた。自動車も通らなければ無論人影もない。足を曳摺りながら、石の門柱についている灯の下に歩み寄り、塀外へ枝を伸した椎の葉かげをせめての雨やどりに、君江はまず泥と雨とに濡れくずれた髪の毛を束ね直そうと、額を撫でながらその手を見ると、べったり血がついている。君江は顔の血に心づくつと俄に胸がどきどき鳴出して、髪や着物にかまっている気力は失せ、声を出して救いを呼ぼうとしたのをわずかに我慢して、唯一心に医者か薬屋かを目当に雨の中を馳け出した。

「#5字下げ」九「#「九」は中見出し」

市ヶ谷合羽阪を上った薬王寺前町の通に開業している医者が、応急の手当をしてくれた上に、自動車まで頼んでくれたので、君江は雨の夜も

いつか明あかるくなりかけた頃、本村町ほんむらちやうの貸間へ帰って来た。顔と手足あしとの疵きずはさほどの事もなかったが、長い間着のみ着のままぐつすり雨あめに濡ぬれていたのも、夜明から体温は次第に昇あがって摂氏摂し四十度を越え、夕方になつても一向下りそうもない容態に、医者チプスは窒扶斯か、肺炎でも起さなければよいかと、貸間の老婆にも注意して行つたが、幸さいわいにしてそれほど事もなく、三日目には入院の沙汰さたも止み、一週間目には布団ふとんの上に起き直つてもいいようになった。

君江は事実を知らせると、大勢見舞みまひいに来るのが煩うるさいのみならず、強姦ごうかんの噂うわさが立たないとも限らないと思つて、カツフェーへは唯風邪ただかぜをひいたことにして置いたのである。八日目の午後になつて、春代が初めて見舞みまひに来たが、その時には額の繻帶ほうたいは既に除かれていたので、疵あとの痕あとはその晩路地るじで転んだことにいいまぎらしてしまつた。次の日には瑠璃子るりこが来たが、これも風邪の重いのに罹かかつたのだとばかり思い込んで歸つた。体温は既に平生に復し食慾もついて来たが、腰や手足うぢあしの打身うちみはまだ直らず、梯子段はしごだんの上り下りにもどうかすると痛みを覚えるくらいである。間貸まかひの婆ばばは市ヶ谷見附内みつけの何とやらいう薬湯やくとうがいいというので、君江はその日の暮方始めて教えられた風呂屋ふろやへ行き、翌日はとにかく少し無理をしても髪かみを結ゆおうと思ひさだめた。

湯から帰つて来ると、郵便が届いている。状袋には署名がないが、読んで行く中に清岡の門人村岡の手紙である事がわかつた。

「#2字下げ」私は直接あなたに手紙を上げていいかどうかを一度考えた後にこの手紙を書きました。何故なぜなれば、先生がこれを知つたなら、先生と私との今までの関係は必断滅かならずするだろうと思つたからです。私はしかしながらあなたが十分に秘密を守つて下さるだけの好意を私のために持つていられる事を信じて、そして私はこの手紙をかきました。あな

たは御存じかどうか知りませんが、先生の令夫人は突然先月の末に或外  
国の婦人と一緒に日本を去られました。先生はこの別離については何ら  
の感激をも催さないように粧よそおつておられますが、しかし現われたる事実  
が凡すべてを打消していません。その後十日ばかりの間における先生の生活は  
飲酒と放蕩ほうとうとのために俄にわかにすさんで行きかけています。この場合、現在  
とそして将来における先生の生涯を慰める力のあるものは、君江さん、  
あなたの愛より外にはないものと私は信じています。尤もつとも先生はあなた  
の名をさえ今では私たちの前では発音することを避けていられます。避  
けていられるだけ、それだけ、私は先生の心の底にあなたの事がまだ真  
実まこと消去きえさらずにいるものと推察するのです。先生は令夫人を失った原因を  
あるいはあなた一人の上に塗りつけようとしているのではないかと疑わ  
れることがある位です。私は去年からの凡ての秘密をあなたに打明けな  
ければなりません。私はあなたに向つて、先生の心の底に去年から絶え  
ず盡つくいでいる報復くわだての企くわだてをお知らせする事を敢あえてするのは、あなたと先生  
との間を遠くさせるためではなくて、かえつて先生がかくの如き残忍性  
を感じたほど、いかにあなたを愛しつつあるかを、私はあなたに向つて  
お知らせしたい誠実さからなのです。先生は二、三日中に丸円発行所主  
催の文芸講演会で講演をされるため仙台から青森の方面へ旅行されます。  
今年の夏はどこか東北の温泉場で避暑するといわれるので、私もこれを  
機会に、久しく郷里の地を踏みませんから、先生をお見送りしてから暫しば  
く東京を去るつもりでいます。その前に一度お逢あいしたいと思つて、実  
は昨日一人でドンフワンへ行つて見ました。そしてあなたが御病気で寝  
ておいでだという事を聞いたのです。私はむしろあなたがこの数日間病  
気のために外出されなかつた事を祝福しなければなりません。私は唯  
それだけを言うに止めて置きます。その理由を明言する事を躊躇ちゅうちゆしてい



ると言ったら、あなたは直ただちに凡てをお察しなさるだろうと思います。それでは、今年の秋風が丈の高くなったコスモスの茎をゆり動うごす頃まで、私は田舎に行つていきましょう。夜の涼しさに銀座の賑にぎわいが復活する時分、またお目にかかるのを楽しみにしていきましょう。七月四日。」

君江は手紙の日附を見て、初めて七月になつたのに心づいたような気がした。それと共に、わずか十日とはたため先夜の事がもう一月も二月も前のような気がして、それ以来長らく枕まくらについていたような心持もした。とにかく一年あまり毎日通かよいなれたカツフェーへ行かない事だけでも、境遇が一変してしまつたような心持がするのに、時節も丁度その日入梅があけて、空はからりと晴れ昼うちの中は涼風が吹き通つていたが夕方からぱったり歇やみ、坐すわつていても油汗が出るような蒸暑い夜になつた。小家の建込んだ路地裏は昨日までの梅雨中の静けさとは變つて、人の話声やら内職のミシンの響などが俄に騒々しく聞え始め、路地の外の裏通にもラジオを始め、何という事なくいろいろな物音がしている。君江はおばさんに呼ばれて下へ行き夕飯をすますと、洗あらいがみ髪のまま薄化粧もそこそこに路地を出た。家にいると毎晩のようにおばさんに話し込まれるのがうるさいのみならず、俄に真夏らしくなつたあたりの様子に、唯何ともつかず散歩したくなつたからである。出でしなに鏡台ひきだの曳出ひきだしから藝口がまぐちを取出す時、村岡の手紙が目に触れたまま一緒に帯の間に挿さ込んだ。半分からは先は夕飯に呼ばれたのと夜になりかけた窓の薄暗さに拾い読みをしたばかりなので、君江はぶらぶら堀端ほりばたを歩みながら、どこか静どてな土手際どてぎわで電燈の光の明あい処かでもあつたらもう一度読み直そうという気もしたのである。しかし電車と自動車の往復する堀端は、新見附しんみつけの土手へ来るまでは手紙を読返す事のできるような処もなかった。行手に牛込見附うしごみつけの貸ボートの灯ひが見え、二、三人女学生風の女が見附の柵さくに腰をかけて涼んで

いたので、君江は蕪の葉つなぎの浴衣のさして目にたたためを好い事に、少し離れた処に佇立んで、束ねた洗髪を風に吹かせながら、街燈の光に手紙を開いて見た。君江には手紙の文体が学生の艶書と同じように気障にも思われるし、また翻訳小説でも読むようにまわりくどくて、どうやら気味のわるい気はしながらも、事実と文飾との境がはつきりしないのである。君江は手紙の意味を手短に言っしまえば、清岡先生はわたしを二号同様にしていたために奥さんに逃げられたのだから、そのつもりでどうかしなければいけない。このまま知らない顔をしていれば、清岡先生はやけ半分、何か仕返しをしないと限定まい。どうか、そういう事のないように気をつけてくれというような事になると考えた。そして随分訳のわからない無理な事を言う人だと腹立しい心持になった。

君江は暫くしてこの手紙は村岡の心から出たものではなく、内々清岡さんに言われて書いたものではないかと、気がついて見ると、あの晩西銀座の蕎麦屋へ這入りかけ、意外な処で村岡に出逢った時の様子から思合せて、自分が車から突落されたのも、事によると清岡さんの教唆から起った事かも知れない。君江は突然襟首に寒さを覚えるような恐怖と共に、ナニ、先が先ならこっちもこっちで負けているものか。どうでも勝手にするがいいというような心持になった。

あまりいつまでも同じところに立ってもいられないので、君江は考え見附を越えると、公園になっている四番町の土手際に出たまま、電燈の下のベンチを見付けて腰をかけた。いつもその辺の夜学校から出て来て通り過る女にからかう学生もいないのは、大方日曜日か何かの故であらう。金網の垣を張った土手の真下と、水を隔てた堀端の道には電車が絶えず往復しているが、その響の途絶える折々、暗い水面から貸ボートの静な櫂の音に雑って若い女の声が聞える。君江は毎年夏になって、

貸ボートが夜ごとに賑かになるのを見ると、いつもきまつて、京子の囲われていた小石川の家へ同居した当時の事を憶い出す。京子と二人で、岸の灯のとどかない水の真中までボートを漕ぎ出し、男ばかり乗っているボートにわざと突当つて、それを手がかりに誘惑して見た事も幾度だか知れなかった。それから今日まで三、四年の間、誰にも語ることできない淫恣な生涯の種々様々なる活劇は、丁度現在目の前に横つている飯田橋から市ヶ谷見附に至る堀端一帯の眺望をいつもその背景にして進展していた。と思うと、何というわけもなくこの芝居の序幕も、どうやら自然と終りに近づいて来たような気がして来る……。

火取虫が礫のように顔を掠めて飛去つたのに驚かされて、空想から覚めると、君江は牛込から小石川へかけて眼前に見渡す眺望が急に何というわけもなく懐しくなった。いつ見納めになつても名残惜しい気がしないように、そして永く記憶から消失せないように、能く見覚えて置きたいような心持になり、ベンチから立上つて金網を張つた垣際へ進寄ろうとした。その時、影のようにふらふらと樹蔭から現れ出た男に危く突き当ろうとして、互に身を避けながらふと顔を見合せ、

「や、君子さん。」

「おじさん。どうなすつて。」と二人ともびっくりしてそのまま立止つた。おじさんというのは牛込芸者の京子を身受して牛天神下に囲つていた旦那の事である。君江は親の家を去つて京子の許に身を寄せた時分、絶えず遊びに来る芸者たちがおじさんおじさんというのをまねて、同じようにおじさんと呼んでいた。本名は川島金之助といつて或会社の株式係をしていたが遣い込みの悪事が露われて懲役に行つたのである。その時分は結城ずくめの凝つた身なりに芸人らしく見えた事もあつたのが、今は帽子もかぶらず、洗ざらした手拭地の浴衣に兵児帯をしめ素足に安

下駄をはいた様子。どうやら出獄してまだ間がないらしいようにも思われた。

川島は手拭浴衣の襟を寒そうに引合せ、「このざまじゃア、どうもこ  
うもあつたものじゃない。むかしはむかし今は今だ。」と取って付けた  
ように笑いながらも、絶えずそれとなく四辺あたりに気を配っているらしく、  
何とつかずそわそわしている。年はその時分既に四十五、六になってい  
たが、白髪もさして目につかず、中肉中丈ちゅうじゅうばいの後姿うしろすがたは、若い妾めかけとつれ立っ  
て散歩に出かける時などは、随分様子のいい血気盛の男に見まがうほど  
であつたが、今見れば、妙に黄ばんだ顔一面、えぐつたような深い皺しわが  
でき、蓬々ほうほうとした髪の毛の白くなつたさまは灰か砂でも浴びたように韮じ  
むさく、以前ぱつちりしていただけ、落窪おちくぼんだ眼は薄気味のわるいほど  
ぎよろりとして、何か物でも見詰めるように輝いている。

「その時分はいろいろ御世話おせわになりました。」と君江は挨拶あいさつにこまつて、  
思出したように礼を述べた。

「やっぱりこの辺にいるのかい。」

「市ヶ谷の本村町にあります。」

「そう。じゃ、またその中、どこかで逢あうだろう。」とそのまま行きか  
けるので、君江は住処だけでも聞いて置きたいと思つて、二歩ふたあし三歩みあし一  
緒に歩きながら、

「おじさん。京子さんにお違いになつて。わたしその後はしばらく違  
いません。」と鎌を掛けて見た。

「そうか。富士見町に出ているそうじゃないか。噂うわさはきいているけれど、  
このざまじゃア行つたところで、寄せつけまいから、いつそ違わない方  
がいい。」

「あら、そんな事はありませんわ。違つてお上げなさいましょ。」

「君子さんの方はその後どうしているんだね。定めし好きな人ができて一緒に暮しているんだろう。」

「いいえ。おじさん。相変らずなのよ。とうとう女給になってしまったのよ。病気でこの一週間ばかり休んでいますけれど。」

「そうか。女給さんか。」

話しながら歩いて行く中、川島は木蔭のベンチには若い男女の寄添っている他には、人通りといつても大抵それと同じような学生らしいものばかりなので、いくらか安心したらしく、自分から先に有合うベンチに腰をおろし、「いろいろききたい事もあるんだ。君子さんの顔を見ると、やっぱりいろいろな事を思出すよ。むかしの事はさっぱり忘れてしまうつもりでいたんだが……。」

「おじさん。わたしも今から考えて見ると、諏訪町で御厄介になっていた時分が一番面白かったんですわ。さつきも一人でそんな事を考出して、ぼんやりしていましたの。今夜はほんとに不思議な晩だわ。あの時分の事を思い出して、ぼんやり小石川の方を眺めている最中、おじさんに逢うなんて、ほんとに不思議だわ。」

「なるほど小石川の方がよく見えるな。」と川島も堀外の眺望に心づいて同じように向を眺め、「あすこの、明いところが神楽阪だ。そうすると、あすこが安藤阪で、樹の茂ったところが牛天神になるわけだな。おれもあの時分には随分したい放題な真似をしたもんだな。しかし人間一生涯の中に一度でも面白いと思う事があればそれで生れたかいがあるんだ。時節が来たら諦めをつけなくっちゃいけない。」

「ほんとうね。だから、わたしも実は田舎の家へ帰ろうかと思っすの。女給をしていても、それは別にかまわないんですけれど、つまらない事から悪く思われたり恨まれたりするのがいやですし、それにいつ

どんな目に遇あわされるか知れないと思うと、何となくおそろしい気がしますから……。おじさん、わたし十日ばかり前に自動車からつき落されて怪我をしたんですよ。まだ、痕あとがついているでしょう。ね。それから腕にも痕が残っています。」と浴衣の袖そでをまくり上げて見せた。

「かわいそうに。ひどい目に逢ったな。恋の意恨いこんか。」

「おじさん。男っていうものは女よりもよほど執念深いものね。わたし今度始めてそう思いましたわ。」

「思込むと、男でも女でも同じ事さ。」

「じゃ、おじさんもそんな事を考えた事があつて。先に遊せんんでいる時分……」

突然土手の下から汽車の響と共に石炭の烟けむりが向の見えないほど舞上つて来るのに、君江は川島の返事を聞く間もなく袂たもとに顔を蔽おほいながら立上った。川島もつづいて立上り、

「そろそろ出掛けよう。差問さしつかえがなければ番地だけでも教えて置いてもらおうかね。」

「市ヶ谷本村町丸 番地、亀崎ちか方ですわ。いつでも正午時分、一時頃までなら家にいます。おじさんは今どちら。」

「おれか、おれはまア……その中きまったら知らせよう。」

公園の小径こみちは一筋ひとすじしかないので、すぐさま新見附へ出て知らず知らず堀端の電車通へ来た。君江は市ヶ谷までは停留場一ツの道程みちのりなので、川島が電車に乗るのを見送ってから、ぶらぶら歩いて帰ろうとそのまま停留場に立留とどまっていると、川島はどっちの方角へ行こうとするのやら、二、三度電車が停とまつても一向乗ろうとする様子もない。話も途絶えたまま、またもや並んで歩むともなく歩みを運ぶと、一歩一歩市ヶ谷見附が近くなつて来る。

「おじさん。もうすぐそこだから、ちょっと寄っていらっしやいよ。」  
と言った。君江はもし田舎へでも帰るようになれば、いつまた逢うかわからない人だと思うので、何となく心淋しい気もするし、またあの時分いろいろ世話になった返礼に、出来ることならむかしの話でもして慰めて上げたいような気もしたのである。

「さしつかえは無いのか。」

「いやなおじさんねえ。大丈夫よ。」

「間借をしているんだろう。」

「ええ。わたし一人きり二階を借りているんです。下のおばさんも一人きりですから、誰にも遠慮は入りません。」

「それじゃちよっとお邪魔をして行こうかね。」

「ええ。寄っていらっしやいよ。おばさんは誰か男の人が来ると、何でもない人でも、いやに気をきかして、すぐ外へ行ってしまうんですよ。あんまり気が早いんで気まりのわるい事がある位ですわ。」

君江は堀端から横町へ曲る時、折好く酒屋の若いものが路端に涼んでいたのを見て、麦酒三本と蟹の罐詰とをいい付け、「おばさん。唯今。」  
といいながら川島を二階へ案内した。留守の中老婆が掃除をしたと見え、鏡台の鏡にも友禅の片が掛けられ、六畳の間にはもう夜具が敷きのべてあった。川島は障子際に突立ったまま内の様子を見てびっくりしたように目ばかり光らせているので、君江は何の事とも察しがつかず、「おばさんはまだ病気だと思っているのよ。今片づけますわ。」と押入の襖をあけて枕をしまいかける。

川島は始めて我に返ったらしく狼狽えた調子で、「君子さん。かまわずに置いてくれ。お客様にされちゃアかえってこまる。」

「じゃ、このままにして置きましょう。御厄介になっている時分、着物

一つ疊んだ事がないって能くお京さんに言われましたわね。だらしがないのはその時分から、おじさんも御承知なんですから。」と鏡台の前にあつたメリンスの座布団ざぶとんを裏返しにして薦すすめた。

おばさんが麦酒と蟹の罐詰つげものに漬物つけものを添えて黙はしこって梯子段はしこだんの上の板の間に置いて行く。その物音に君江は立たつて座敷へ持運び、「おじさん。お肴さかななら何でも御馳走しますわ。表の家が肴屋ですから窓から呼べば何でも持つて来ます。」

川島は君江のついだビールを一息にコップ一杯飲干したまま、何ともいわず、明放あけはなした窓から見える外の方へ気をくばっている様子に、君江は一度懲役に行くところまで世間へ気かねるようになるものと、気がついて見ればいよいよ気の毒になつて、

「わたし、今日起きたせいだか、暑いくせに何だか風が寒いような気がするのよ。」とその実蒸暑じやうじゆくてならないのに、窓の障子を半ばしめてしまった。

川島は二杯目のビールたぢまに忽たちち目の縁ふちを赤くして、「世の中は何といつてもやっぱり酒と女だな。おれももう一度奮発して働いて見ようかと思つんだが、ひびたけの入いつた身体じゃどうする事もできない。君子さんなんかはこれからだ。これから先ほんとうに世の中の味がわかつて来るんだよ。田舎へ帰るなんて、先刻さつきそう言いっていたけれど、半月といられるものか。おれ見たようになって、赤い布団を見たり、一杯飲んでぼうつとすると、やっぱりむらむらとして来るからな。」

「おじさん。もうすっかり堅かくなつておしまいなのね。」

君江は川島が出獄して後現在ごげんざいどうしているのかきいて見たいと思おもいながら、あけすけには問といかねて遠廻とほましにこう言いつて見たのである。川島は大分好よい心持こころもちになつたと見え、調子もいくらか元氣げんきづいて、「無い袖そで



は振れないから一番いいのさ。娑婆しゃはへ出てから、乞食こじきも同然、お酒どころか飯も食えない事があつたよ。倅せがれが丈夫でいたらどうにか力になるんだがね。おれがあつちへ行つている中に肺炎で死んでしまふし、唄うた娘むすめと一緒に田舎へあずけてある始末だ。まだ四、五年たたなくつちや芸者に売る事もできないのさ。以前世話をした奴らに頼んだら、どうにかしてくれない事もなかるうが、それほど耻はじを晒さらして歩く位なら一思ひとおもいに死んだ方がまだしもだよ。君子さん、今夜の事はあの世へ行つても……おじさんは忘れないでお礼を言うよ。」

「あら。おじさん。そんな事……。わたしの方がいくらお世話になつたか知れませんか。こうして一人でやつて行けるようになったのも元はといえ、みんなおじさんのおかげじゃありませんか。始め事務員になつたのも、おじさんのおかげだし……。それから段々いろいろな事を覚えて……。方々の待合や何かの様子を覚えたのもやつぱりおじさんのおかげですわ。」

「はははは。今夜のビールはわるい事を教えてもらった御礼か。それなら、おじさんも遠慮せずに御馳走になろう。あの時分商売人の京子がびつくりしたくらいだからな。今はたいしたもんだらう。」

「割合にそうでもない事よ。あの時分会社かたの方には随分おちかづきになつたわねえ。みんなどうなすつてしまつたんでしよう。カッフェーでもお見かけした事ありません。」

「そうか。みんな相応に年をとつていたからな。それにあの会社もつぶれてしまったから、窮こまつているのはおればかりでもないんだらう。」

「おじさんなんか。まだまだそんなに老おいこ込む年じゃないわ。六十になつても、いやになるほど元気な人があつてよ。」と君江はその実例に松崎博士の事を語ろうとしてそのまま黙つてしまつた。

「遊びも癖になるとつい止められなくなるもんだ。」

「おじさんなんかも、以前が以前だから、また直に癖がついてよ。」

十日ばかり君江も酒を断っていた後なので、話をしてる中に忽ち取寄せた三本のビールを空にしてしまった。

「商売だけあって凄くなつたな。あすこにあるのはウイスキーじゃないか。」

「アラ。病気や何かで、すっかり忘れていたわ。」と君江は柵の上に乗せたままにして置いた角壇の火酒を取りおろして湯呑につき、「グラスがないからこれで我慢して下さい。」

「おれはもういけない。」

「じゃア、ビールか日本酒を貰いましょう。」

「もう何にももらえない。久振りで飲むとカラ意久地がない。帰れなくなると大変だ。」

「お帰りになれなかつたら、そこへお休みなさい。かまいません。」と君江は湯呑半分ほどのウイスキーを一口に飲干す。

「女給さんの手並みはなるほど見事だ。」

「日本酒よりかえっていいのよ。後で頭が痛くならないから。」と咽喉の焼けるのを潤すために、飲残りのビールをまた一杯干して、大きく息をしながら顔の上に乱れかかる洗髪をさもじれつたそうに後へとさばく様子。川島はわずか二年見ぬ間に変れば変わるものだと思つと、じつと見詰めた目をそむける暇がない。その時分にはいくら淫奔だといつてもまだ肩や腰のあたりのどこやらに生娘らしい様子が残っていたのが、今では頬から頤へかけて面長の横顔がすっかり垢抜けして、肩と頸筋とはかえってその時分より弱々しく、しなやかに見えながら、開けた浴衣の胸から坐った腿のあたりの肉づきはあくまで豊艶になつて、全身の姿の何

処ということなく、正業の女には見られない妖冶な趣が目につくようになった。この趣は譬えば茶の湯の師匠には平生の挙動にもおのずから常人と異ったところが見え、剣客の身体には如何にくつろいでいる時にも隙がないのと同じようなものである。女の方では別に誘う気がなくとも、男の心がおのずと乱れて誘い出されて来るのである。

「おじさん。わたしも今ので少し酔って来ましたわ。」と君江は横坐りに膝を崩して窓の敷居に片脛をつき、その手の上に頬を支えて顔を後に、洗髪を窓外の風に吹かせた。その姿を此方から眺めると、既に十分酔の廻っている川島の眼には、どうやら枕の上から畳の方へと女の髪の乱れくずれる時のさまがちらついて来る。

君江は半眼をつぶってサムライ日本何とやらと、鼻唄をうたうのを、川島はじつと聞き入りながら、突然何か決心したらしく、手酌で一杯、ぐつとウイスキーを飲み干した。

\*

\*

\*

\*

何やら夢を見ているような気がしていたが、君江はふと目をさますと、暑いせいかその身は肌着一枚になって夜具の上に寐ていた。ビールやウイスキーの壇はそのまま取りちらされているが、二階には誰もいない。裏隣の時計が十一時か十二時かを打続けている。ふと見ると枕もとに書簡箋が一枚ニツ折にしてある。鏡台の曳出しに入れてある自分の用箋らしいので、横になったままひろげて見ると、川島の書いたもので、

「#2字下げ」何事も申上げる暇がありません。今夜僕は死場所を見付けようと歩いている途中、偶然あなたに出逢いました。そして一時全く絶望したむかしの楽しみを繰返す事が出来ました。これでもうこの世

に何一つ思置く事はありません。あなたが京子に逢ってこのはなしをする間には僕はもうこの世の人ではないでしょう。くれぐれもあなたの深切せつを嬉しいと思います。私は実際の事を白状すると、その瞬間何も知らないあなたをも一緒にあの世へ連れて行きたい気がした位です。男の執念はおそろしいものだと自分ながらゾツとしました。ではさようなら。私はこの世の御礼にあの世からあなたの身边を護衛します。そして将来の幸福を祈ります。KKより。」

君江は飛起きながら「おばさんおばさん。」と夢中で呼びつづけた。

「#地から2字上げ」昭和六年辛未かのとみづ三月九日病中起筆至五月念二夜半纒  
脱初稿荷風散人

底本：「つゆのあとさき」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年3月16日改版第1刷

2010（平成22）年4月26日第28刷

底本の親本：「荷風全集 第八巻」岩波書店

1963（昭和38）年12月

入力：米田

校正：門田裕志

2012年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。